

音戸山古墳群発掘調査概報

昭和 58 年度

京 都 市 文 化 觀 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

狩獵と採集に明け暮れた原始の時代以来、我が京都市域には、居住に適した平野部及び緩斜面が、約250平方キロメートルも所在し、その範囲に祖先の営為を示す遺跡が、平安京跡をはじめ約830箇所も含まれています。1平方キロメートル当たり3箇所強の遺跡が分布することになり、全国平均の2箇所強を上まわっております。したがって、宅地造成等の中規模以上の開発があれば、遺跡に遭遇する可能性が高くなります。

本市では、このような状況の中で、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、保存し難い遺跡については調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めています。

この概報は、昭和58年度国庫補助事業として実施した調査の結果をまとめたものであります。おわりに調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導、御協力をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和59年3月

京都市文化観光局

例　　言

1. 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う昭和58年度の音戸山古墳群発掘調査概要報告である。発掘にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターもこれに加わり調査を実施した。
2. 調査箇所は以下のとおりである。

名称 音戸山 1号墳	所在地 京都市右京区太秦三尾町
名称 音戸山 3号墳・4号墳・5号墳	所在地 京都市右京区鳴滝音戸山町
3. 発掘調査の担当者と調査参加者は以下のとおりである。

音戸山 1号墳	京都市埋蔵文化財調査センター技術吏員 玉村登志夫・梶川敏夫・北田栄造、財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査員 丸川義広
音戸山 3号墳・4号墳・5号墳	財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査員 平田 泰・丸川義広、補助員 東 洋一・大立自 一・津々池惣一
4. 本書の作成は、北田と丸川が共同で行い、写真撮影は同研究所の牛島 茂が担当した。また石棺石材に関する顕微鏡写真の撮影及び執筆は同研究所の岡田文男が担当した。
5. 本書で使用した方位は、平面直角座標系VIによった。標高は京都市建設局水準点No260-00-2(T.P. 42m582)によった。
6. 本書で使用した位置図は、京都市発行の1/2,500都市計画基本図(鳴滝・宇多野)を調整使用したものである。

本文目次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査地の位置と環境	1
3 調査の経過	7
第Ⅱ章 古墳の調査概要	9
1 音戸山1号墳	9
2 音戸山3号墳	17
3 音戸山4号墳	22
4 音戸山5号墳	26
第Ⅲ章 まとめ	34
第Ⅳ章 資料紹介	37

図版目次

- 図版一 遺跡 1 航空写真(丸印が調査地)
2 航空写真(丸印が調査地)
- 図版二 遺跡 1 1号墳全景(上面, 東から)
2 石室全景(上面, 東から)
3 遺物出土状態(上面, 北東から)
- 図版三 遺跡 1 1号墳全景(下面, 東から)
2 石室奥壁(下面, 東から)
- 図版四 遺跡 1 3号墳調査前全景(北から)
2 3号墳全景(北から)
- 図版五 遺跡 1 3号墳奥壁と遺物出土状態(南から)
2 石室全景(南から)
3 閉塞の状態(南東から)
- 図版六 遺跡 1 4号墳全景(南から)
2 奥壁と遺物出土状態(南から)
- 図版七 遺跡 1 4号墳(右)と5号墳(左)調査前全景(南西から)
2 5号墳調査前全景(南東から)
- 図版八 遺跡 1 5号墳石室全景1(南から)
2 石棺破片出土状態(北西から)
3 灰烟薬壺出土状態(南西から)
- 図版九 遺跡 5号墳石室全景2(南から)
- 図版十 遺物 1号墳出土土器
- 図版十一 遺物 3号墳出土土器
- 図版十二 遺物 4号墳(1~4), 5号墳(1・2)出土土器, 5号墳出土石棺(最下段1・2)
- 図版十三 遺物 1 1号墳出土鉄器, 銀環
2 5号墳出土鉄器, 4号墳出土金環(右上1・2)

写真目次

- 写真1顕微鏡写真(×40) 32

插図目次

図1	嵯峨野地域の地形分類図(1:50,000)	2
図2	嵯峨野地域の古墳分布図(1:50,000)	3
図3	周辺古墳分布図(1:5,000)	4
図4	調査地周辺の等高線図(1:6,000)	6
図5	古墳群位置図(1:1,500)	7
図6	調査工程図	8
図7	1号墳墳丘測量図(1:200)	9
図8	1号墳墳丘断面図(1:80)	10
図9	1号墳石室実測図(1:50)	10-11
図10	出土土器実測図	14
図11	鉄器・銀環実測図	15
図12	3号墳墳丘測量図(1:200)	17
図13	3号墳墳丘断面図(1:80)	18
図14	3号墳石室実測図(1:50)	19
図15	出土土器実測図	21
図16	4号墳墳丘測量図(1:200)	22
図17	4号墳墳丘断面図(1:80)	23
図18	4号墳石室実測図(1:50)	24
図19	出土土器実測図	25
図20	金環実測図	26
図21	5号墳墳丘測量図(1:200)	27
図22	5号墳墳丘断面図(1:80)	28
図23	5号墳石室実測図(1:50)	29
図24	鉄器実測図	31
図25	石棺実測図	32
図26	出土土器実測図	33
図27	石室床面の比較図(1:50)	34
図28	最下段石材の寸法比較図	35
図29	採集土器実測図	37

第Ⅰ章 調査経過

1 調査に至る経緯

音戸山古墳群はかなり以前の道路拡幅工事によって4基の墳丘が削られたものの、現在までよく現状をとどめる古墳群であった。ところが、京都市周辺部における宅地化の波はこの地にもおよび、1号墳はその東側にある通称摺鉢池の埋立とともに埋没し、さらに3・4・5号墳も宅地造成の計画がもちあがったため、それぞれの古墳を発掘調査することになった。

1号墳は昭和58年4月から調査に入ったが、調査開始時にはすでにその位置が確認できない程盛土化されていたため、まずトレチを入れて古墳の位置を確認することから始めた。3～5号墳の調査も同年6月から約3ヶ月の期間で実施したが、特に3号墳では墳丘がすでに盛土に覆われていたため、これを排除することから始めた。

なお、これらの古墳は今回の開発計画ではこれ以上削られることはないものの、調査終了後は埋没する結果となった。

2 調査地の位置と環境

地形的環境 音戸山古墳群の立地する嵯峨野地域一帯は、山城地方でも有数の古墳分布地として知られている。この地域の地形的環境について若干述べておくと、まず背後には古生代に堆積したチャート等からなる丘陵・山地があり、その前面には3段からなる河岸段丘と、御室川や有栖川が形成した扇状地、及び桂川の氾濫原が広がっている。その範囲は東西約4.5km、南北で最大3kmを測るが、一見広大そうに見えるこの地域も地形分類図をもとによく観察してみると、実際には中小河川の下流によって東西方向に細かく分断されている様子がわかる。中でも御室川の形成した谷地形はその規模が最も大きく、嵯峨野地域の東限をなす1つの目安となっている。この御室川の開析谷は一方で本来ひと続きであった古生層からなる山地の奥深くにまで及んでおり、この結果東南方向に延びる長さ約2kmの細長い丘陵を形成せしめ、同時に音戸山古墳群を始めとする嵯峨野地域の古墳群が築かれる立地環境を作り出している。

嵯峨野地域の平野部に注目すると、ここでは広沢池に流入するかたちの大きな谷地形によって、平野部が東西に二分されていることに気付く。この東半分の地域は河岸段丘の発達

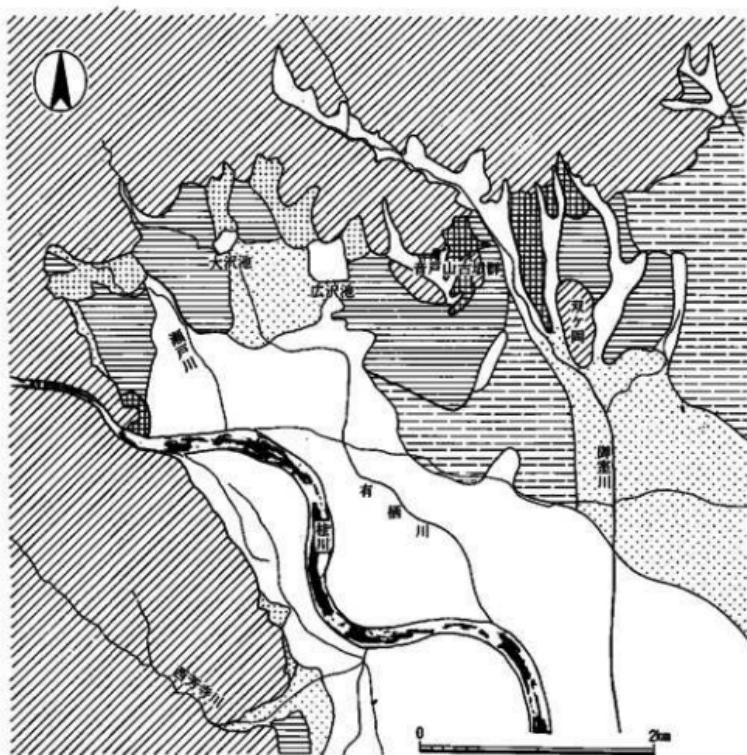


図1 猿堀野地域の地形分類図(1:50,000)

が著しく、このうち下・低位面は現在の太秦地区と重複しており、大型古墳の分布状況や近年の発掘調査で見つかった古墳時代の集落跡の存在により、古代以来生活の場となっていたことがわかる。これに対して谷地形を挟んだ西半分の地域は、瀬戸川の下流によって段丘の下位面が二分されているが、大覺寺古墳群や猿堀七ツ塚古墳群等はいずれもが東側の段丘面に立地しており、現在のところでは西半分の段丘上には顯著な遺跡は知られていない。

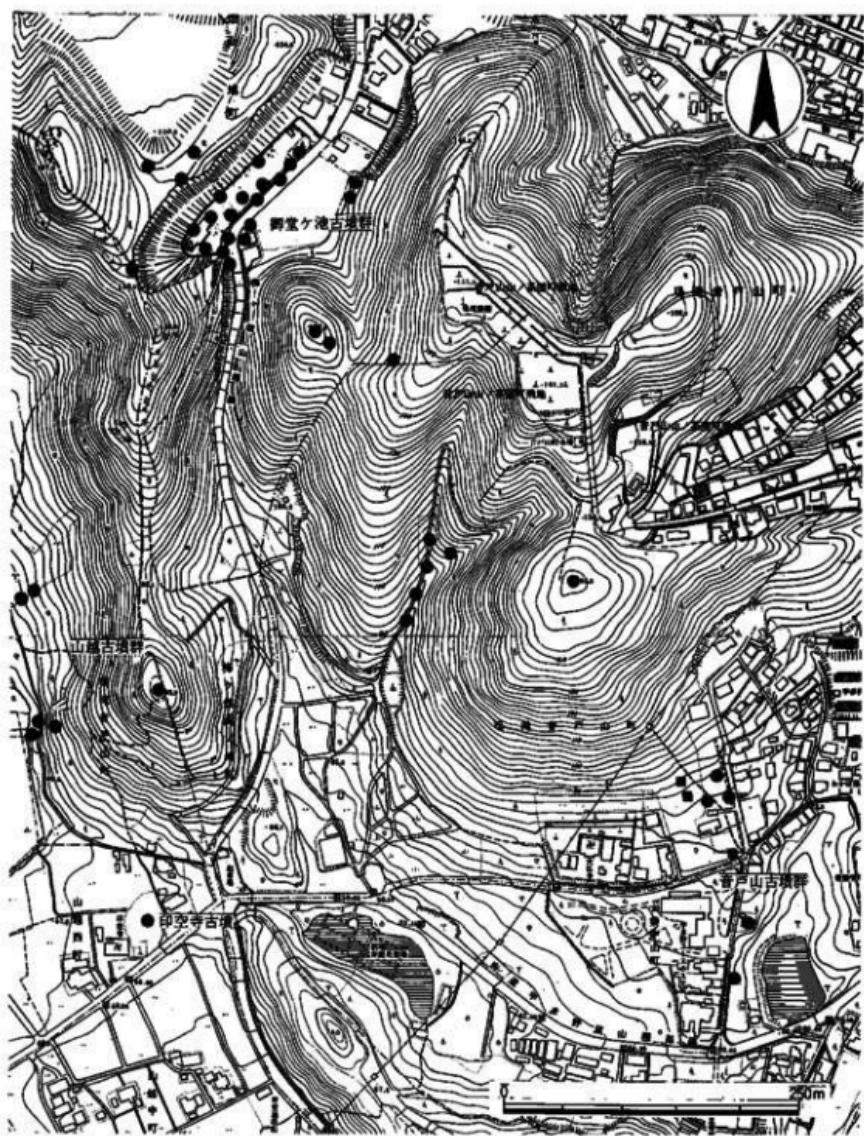


図3 周辺古墳分布図(1:5,000)

歴史的環境

一般に嵯峨野と呼ばれているのは、北を北嵯峨の丘陵地帯、南を桂川に挟まれ、西は小倉山、東は双ヶ岡を限界とした地域を指している。この地域に古墳が築造されるのは6世紀に入ってからのことであるが、この時期に突如として造り出された古墳は、その後7世紀の前半までの間に200基近く築造されている。この嵯峨野地域の開発は5世紀後半に朝鮮半島から移住してきた秦一族によるものと考えられている。彼らのもつ先進的な技術は、これらの古墳に象徴されるように、この嵯峨野一帯を含めたさらに広い範囲において發揮されたものと考えられる。

嵯峨野の古墳はその立地からみて大きく3つのグループに分けられている。ここではそのグループごとに古墳の性格と現状をみていきたい。

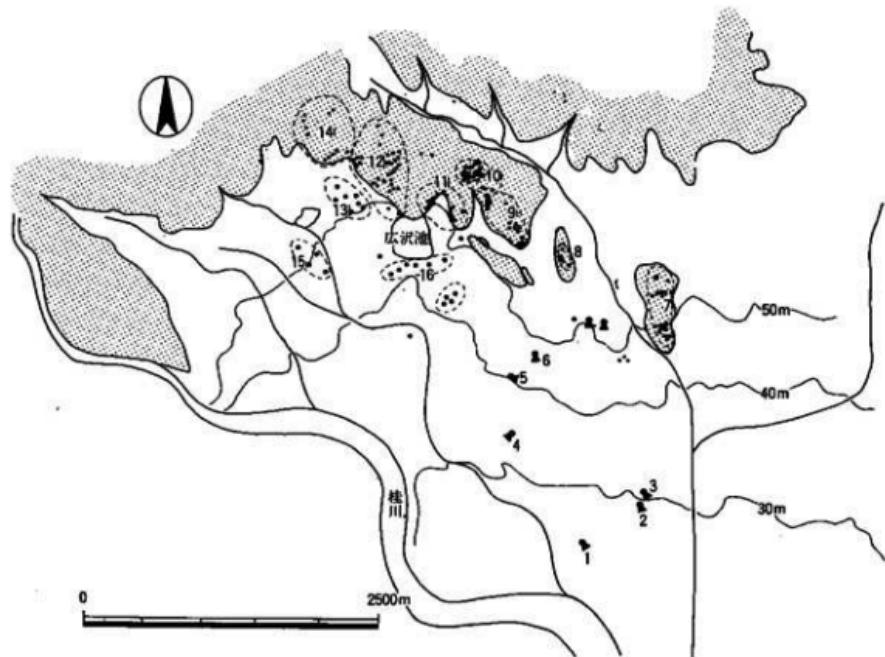


図2 嵯峨野地域の古墳分布図(1:50,000)

1. 殿ノ山古墳 2. 天守古墳 3. 清水山古墳 4. 蛇塚古墳 5. 仲野親王陵古墳 6. 太樂馬原古墳
7. 双ヶ岡古墳群 8. 三瓦山古墳群 9. 音戸山古墳群 10. 嬬堂ヶ池古墳群 11. 山越古墳群
12. 長刀坂古墳群 13. 嵯峨七ツ塚古墳群 14. 朝原山古墳群 15. 大覚寺古墳群
16. 広沢古墳群

まず第一のグループは、段丘低位面及び氾濫原に築かれた数基の前方後円墳で、このうち蛇塚古墳と天塚古墳は国の史跡に指定されているが、蛇塚古墳に関しては、その指定範囲が後円部の石室周辺のみであるため、周りには民家が建ち並んでいる。また仲野親王陵古墳は宮内庁の陵墓の指定を受けているため、墓域には入れないが保存状態はよい。この他の馬塚古墳・段ノ山古墳・清水山古墳などは全壙てしまっている。これらの古墳は前方後円墳で、蛇塚古墳・仲野親王陵古墳などは全長75mを測る大型のものである。なお、これらの古墳の時期的な関係をみると、現在確実に年代のわかる最古のものは天塚古墳であり、6世紀の前半に築造されている。また逆に最も新しいものとしては蛇塚古墳が7世紀前半の築造と考えられている。この数基の前方後円墳のグループはその出現から最後の古墳築造まで、約1世紀間にわたり首長墓の系譜をたどれるという特色をもっている。

この前方後円墳のグループの後方にみられる台地平坦部には独立した円墳が点在し、第2グループを形成している。これらの古墳は数基づつがまとまって点在しているが、各古墳の規模は直径20~50mのやや大型の円墳である。その築造年代は6世紀中頃から7世紀前半のものと考えられている。このグループの主な古墳群は大覺寺古墳群の4基・嵯峨七ツ塚の7基・広沢池畔の6基などがあげられる。この中で大覺寺古墳群に属する南天塚古墳(大覺寺3号墳)は府立北嵯峨高校の建設に伴い発掘調査されており、その築造年代は6世紀末葉とされている。なお、同じ大覺寺古墳群に属する入道塚古墳(同2号墳)はこのグループ内における唯一の方墳で一辺が約30mを測る。広沢池から大沢池一帯に点在するこれらの古墳は、かなり盗掘を受けているものの、その大半は歴史的風土特別保存地区内にあり、また陵墓参考地になっているものもあるため、比較的よく保存されている。ただしこれらの指定区域外になる広沢池南側の広沢古墳群の数基や西裏町にあった一本木古墳などは、調査されずに破壊されている。

第3グループは台地後方一帯の丘陵地に群在するもので、朝原山古墳群(11基)、長刀坂古墳群(31基)、山越古墳群(16基)、御堂ヶ池古墳群(26基)、音戸山古墳群(14基)などからなっている。それぞれの古墳群は直径10m前後の小円墳で構成されているが、今回の音戸山古墳群の調査でも明らかになったように、他の古墳群の中にも何基かは方墳も混っているものと思われる。この丘陵一帯の古墳は、台地上の古墳に比べその出現が若干遅れており、6世紀後半から築造が開始される。なお、その終焉は他のグループ同様7世紀前半である。これらの古墳も風致地区の強い規制内のものや宮内庁の敷地内のものは現状を維持しているが、そこから外れた古墳は次々に破壊され、御堂ヶ池古墳群などは26基のうち現存する古墳

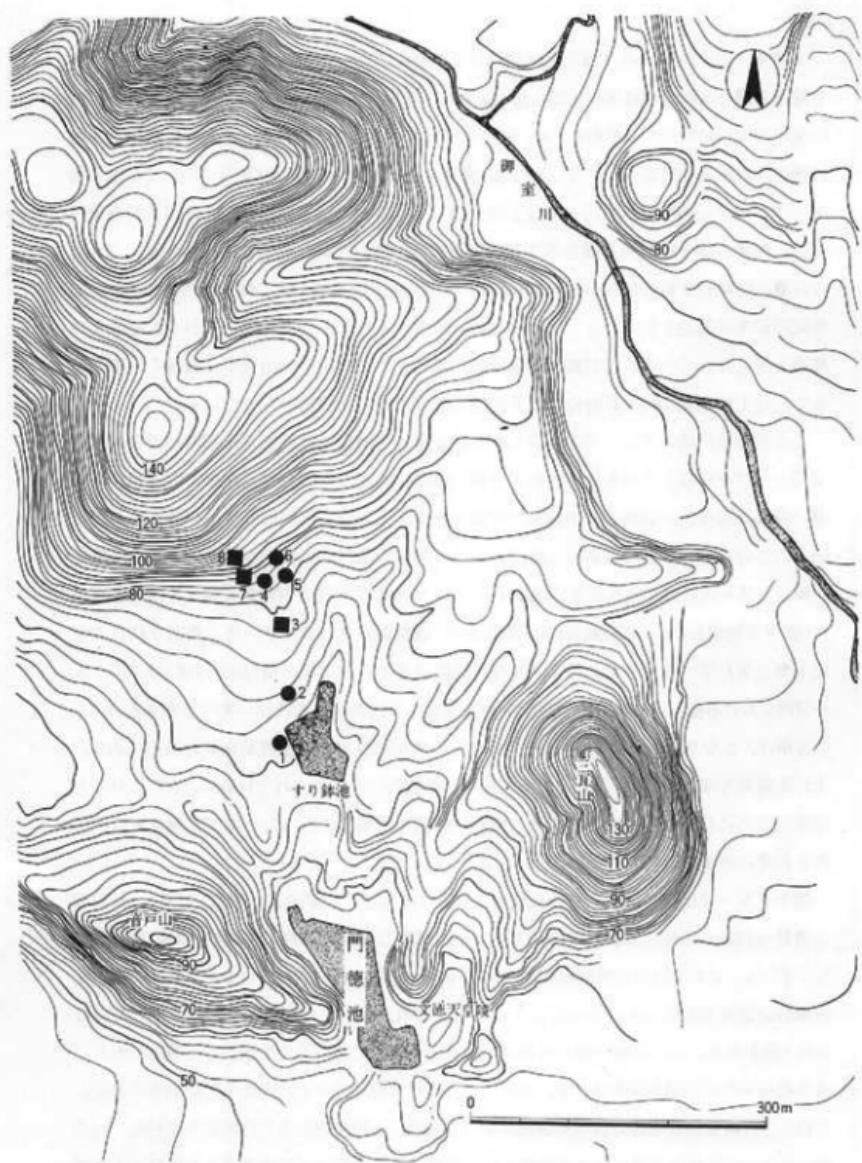


図4 調査地周辺の等高線図(1:6,000)

は8基を数えるのみとなつた。今回発掘調査を実施した音戸山古墳群もこれとほぼ同様である。

さてこれら三つの古墳のグループは、その出現時期及び墓域を異にしているが、6世紀後半以降はそれぞれのグループで同時に古墳が築かれるという特色をもつている。このような古墳の建造に現われた現象は、6世紀以降の嵯峨野地域における社会的秩序を反映したものとして興味深い。

3 調査の経過

今回の発掘調査では、墳丘・主体部とともに調査の後、盛土によって保存されることが決定していたので、調査の方法も石室内の精査に主眼をおき、墳丘については必要な断ち割りトレンチを入れる程度のものにとどめた。なお、調査の進行状況については図6を参照されたい。

1号墳 調査はまず古墳の位置を確認するため、東西及び南北に細いトレンチを設けた。このトレンチにおいて石室の輪郭が検出されたので、石室の調査と南北トレンチの南側を延長することにより、周溝の検出作業を行った。石室内の調査では、床面を検出した状態での全景及び個別写真を撮り、石室実測の後、最後の断ち割りを行ったところ、約30cm下から須恵器の杯が出土し、さらに敷石と考えられる小砾塊が検出されたため、全体の掘り下げ作業を進め、完掘の後再度

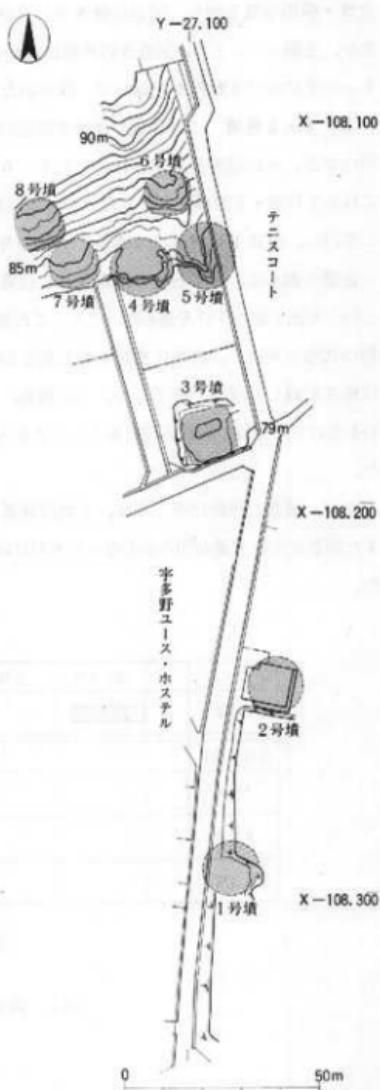


図5 古墳群位置図(1:1,500)

全景・個別写真を撮り、図面の継ぎ足しを行った。石室の掘形は南北ラインでは確認されたが、主軸ライン上では調査区の外側に広がるため確認されなかった。最後に墳丘断ち割りトレンチにおける断面を記録して、保存のため埋戻しを行い調査を終了した。

3・4・5号墳 この調査ではまず周辺の伐採・下草刈りを行い、対象地の地形測量を行ったが、その結果従来知られていた4～6号墳の西隣りで新たに2基の古墳を発見し、これを7号墳・8号墳と各々名付けた。地形測量は調査地内に任意方向のトラバースを設定して行い、後に1号墳付近の補足と平面直角座標系VIへの取り付けを行った。

古墳の調査は、まず石室の推定される位置にトレンチを設け、石材の並び方を確認するという方法で堀り下げを進めた。こうして石室内を精査した後、全景写真を撮り、石室・遺物の状態を実測し、最後に墳丘を断ち割るかたちでトレンチを入れ、断面による墳丘構築状態を記録し、埋戻し終了した。この場合、3号墳のように、円墳か方墳か区別のつかないものについては、斜め方向にもトレンチを入れ周溝の位置から墳形を推定する方法をとった。

なお、調査の開始に伴っては、土地所有者の方々に出席していただき慰靈祭を行った。また調査成果の大要が明らかとなった8月には地元の人達を対象にささやかな説明会を催した。

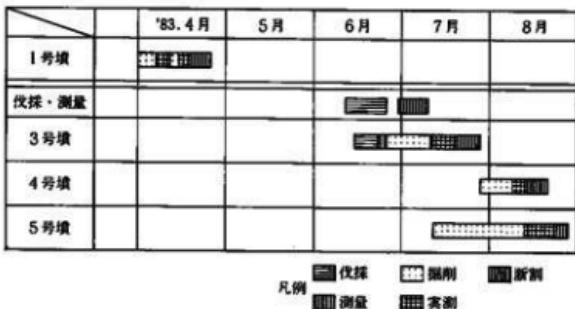


圖 6 調查工程圖

第II章 古墳の調査概要

1 音戸山1号墳

墳丘 1号墳の墳丘規模に関しては、調査時すでにまわりは造成後の植樹が行われており、墳丘を画する周溝は石室の南側トレーニングで確認したにとどまった。しかし、今回の成果と過去の踏査記録により墳丘規模を復原すると、墳形は円墳で、径約14m、高さ約3mのものが推定できる。

〔封土〕 墳丘の構築状態を主軸直交断面で観察すると、まずベースとなる地山は地形に沿って北から南に行くに従い若干低くなっている。その最上層は茶灰色泥砂層(5)で、この下には黒褐色のマンガンを含んだ間層(6)がみられ、さらに石室床面付近では赤褐色のしまった層になる。石室を構築するための掘形と、石室中央から約6mの所で確認された周溝

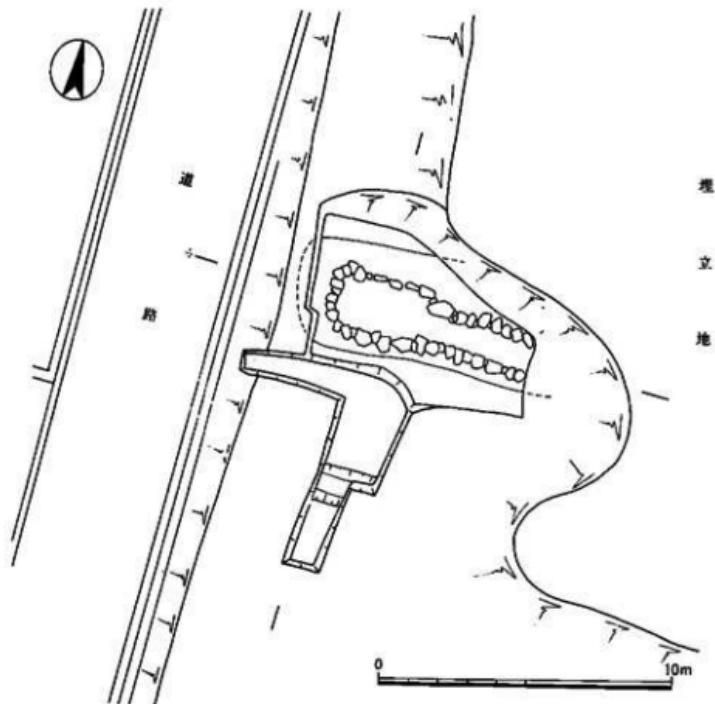


図7 1号墳墳丘測量図(1:200)

は、この層を掘りこんで造られている。

作図した南北断面における石室掘形の規模は、肩部で幅3.5m、深さは80cmを測る。石室内の埋土については後述するが、石室と掘形埋土の状態は、最下段石を据え付けた後、暗褐色砂質土(12)を入れており、さらにこの状態で3段目までの石材を積み上げている。すなわち、石材の大きさにより異なる箇所もあるが、基本的には3段目までの石材据え付けは石室掘形内で行われていることになる。さらにそれ以上の石室構築は、石材の積み上げと盛土とが相前後して行なわれている。

周溝は幅90cm、深さ25cmの浅いU字形を呈している。埋土は暗茶灰色の混りのない土である。

内部構造 本古墳の主体部は両袖式の横穴式石室で東南東の方向に開口している。その規模は今回調査した4基のうち最も大きく、また唯一の両袖式石室であった。

〔石室内の堆積層〕 石室内の埋土は上部床面より上層においては大きく3層に分かれる。ほぼ水平堆積であるため全面からの土砂の流入が考えられるが、石材の残存状況を考慮すると主に上部及び北側壁からの流入が想定される。

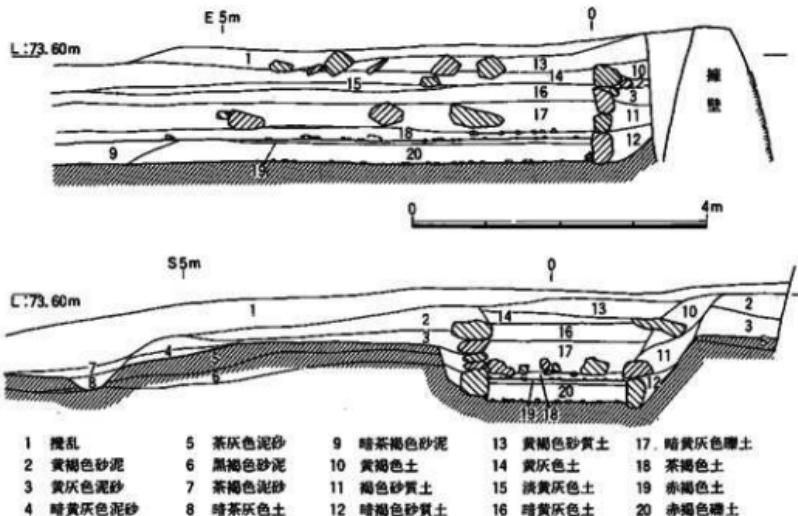
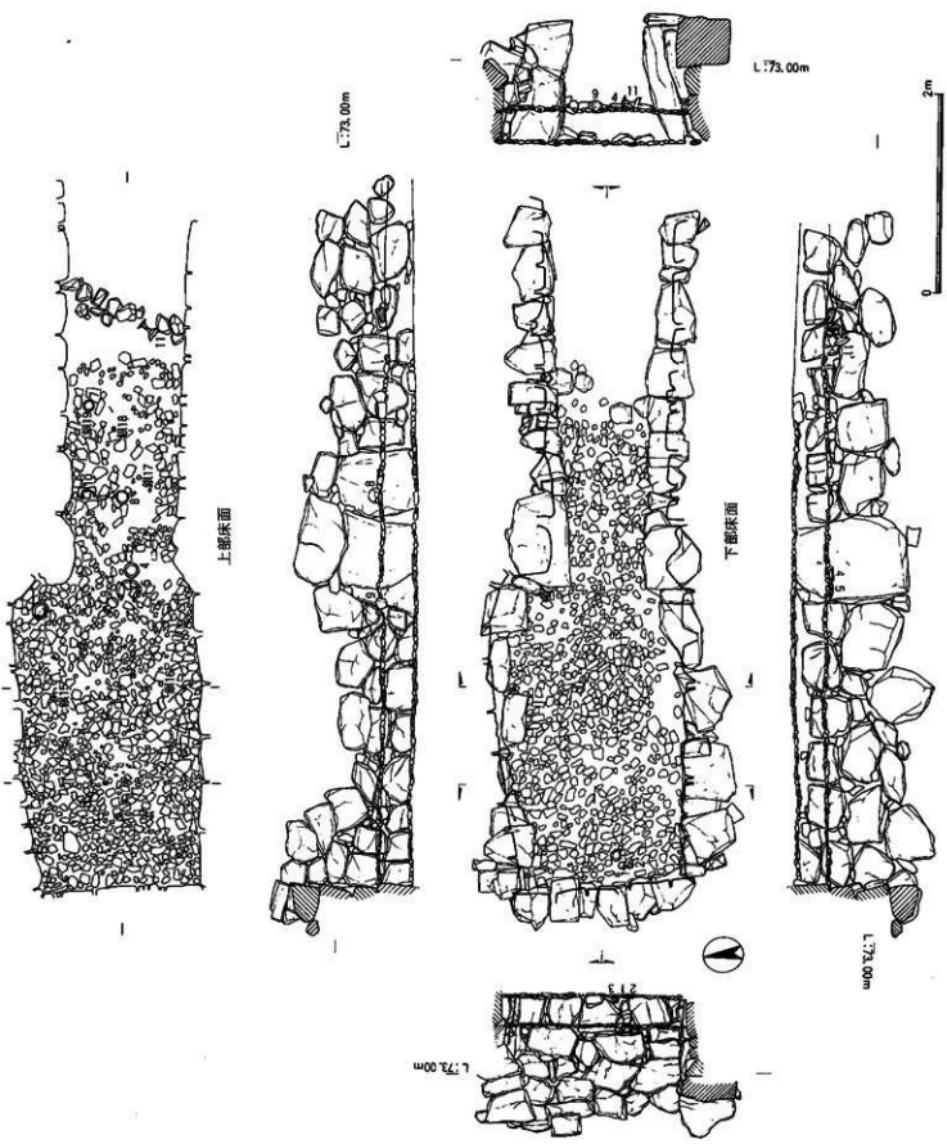


図8 1号墳墳丘断面図(1:80)

图 9 1号砾石层剖面图 (1:50)



石室内の掘り下げは、主軸とその直交ライン 1 m 毎にセクションを残して実施した。まず石室を検出した面では多数の石材が転入しており、この検出面より約 40 cm までの堆積層は、上から黄灰色土層(14)、暗黄灰色土層(16)であった。この 2 層は小礫塊は含んでいるものの石室内面に使用されたと思われる石材は含んでいなかった。さらに下層には暗黄灰色礫土層(17)が厚さ 40 cm 程あり、多数の石材を含んでいた。上部床面上には茶褐色のしまった土(18)が厚さ 10 cm 程あり、この層を除去すると床面の敷石が表われる。なお、羨道部付近のこの層上部には厚さ 3 ~ 5 cm 程の炭層があり、さらにこの面の袖石付近からは平安時代後期の土器皿や鉢が出土している。これらの堆積層の観察では床面直上の茶褐色土層は石室の隙間からの自然流入であり、この上面で炭層や土器が出土したことは平安時代後期までは玄室及び羨道部の一部には天井石が存在していたことを示すものと考えられる。

なお、天井石及び壁面上部石材は大きく分けて 2 度の転落があり、現在に致ったものと考えられる。この 2 度にわたる石材の転落は、平安時代後期以降いつの時期かは不明であるが、一度目はこの炭層の上面に石材が転落しており、その量からみるとこの時に天井石及び石室上部を構成する石材の大半が転落したものと思われる。そして 2 度目の転落の時期は、すでに石室埋土が床面から 1 m 程堆積した後のことであった。ただし、石室内部に転落した石材は小型のものが多く、天井石等の大半は持ち出されことが予想される。

上部床面は 10 cm 前後の敷石が施されており、床面の整地層は赤褐色のよくしまった層(19)であった。この床面上で多数の遺物を検出し、これが本来の床面であろうと考えたが、壁面石材をみると最下段石の頭部が若干出ているだけの状態であったので断ち割りを行なったところ、奥壁近くで須恵器が出土し、さらに下面にも同様の敷石をもつ床面が存在することが明らかとなった。

下部床面は上部床面の約 30 cm 下にあり、この間には赤褐色のよくしまった礫土層(20)と上部付近には礫を含まない層(19)が約 5 cm ほど入れられていた。特に赤褐色礫土層は一様の土層であることから、上部床面を作る際に一度に入れられたものと思われる。

(内部構造) 下部床面での石室規模は、残存長 7 m、玄室長 3.1 m、同幅は奥壁付近で 1.65 m を測り、最大幅は袖石寄りにあり、1.95 m を測る。奥壁付近と袖石付近ではその幅に約 30 cm もの差がみられるが、主軸から見た場合、南側壁はほぼ直線的なのに対し、北側壁は奥壁から袖石に向かってかなり開くという特異な形態を示している。また北側壁においてはこの開いた分だけ袖の所で内行しているため、玄室と羨道とを厳然と区別しているように見える。羨道部は長さ 3.9 m 以上、同幅は袖石のところで 1.2 m、最大幅は開口部寄りにあり、

1.35m を測る。同じく狭道部を主軸から見た場合、玄室とは異なり、袖部から開口部に向ってハの字形にゆるやかに開いている。石室高は天井石及び壁面上部石材が欠損しているため不明であるが、現存する最大高は奥壁で1.45mを測る。石材の大半はこの付近一帯の基盤をなすチャートを使用している。

石材の規模は、石室全体を通して最も大きいのが南壁の袖石であり、幅93cm、高さ1.2mを測る。次に大きいものはやはり北壁の袖石で、幅72cm、高さ80cmを測る。なおこの袖石のすぐ横の狭道に使用された石材もこれとほぼ同じ規模をもっており、この3石が現存する石材では特に大きいものである。

石組の状態は、玄室内では幅40cm前後、高さ30cm前後のほぼ同じ大きさの石材を最下段に据えている。これらの玄室内の最下段石は、床面が堅くしまっていることもあり、さほど掘りこんでいない。むしろ南壁などは床面よりも5~10cmほど浮いた状態にある。石室掘形は地山を掘り込んで整形しているが、この南壁ではその掘形が段状になっており、その段の平坦面に最下段石を据え付けた状態になり、床面はこの最下段石の下になってしまっている。なお、袖石の据え付けは、他の最下段石よりも若干深くなっているが、これは袖石のもつ重量的なものや、石室構築の際の指標石としての役割などによるものと考えられる。最下段石がほぼ均等な大きさのものを使用しているのに対し、2段目以上の石材は大小を組み合わせて使用している。奥壁及び北壁の2段目以上の石材は最下段石とほぼ同じ大きさのものが多いのに比べ、南壁の2段目以上の石材はその大半が最下段石よりも大きなものを使用している。このことは玄室部・狭道部を通してみられることである。石室の構築は、2段目までがほぼ垂直で、3段目以上において持送りを行っている。なおこの持送りは狭道部では両壁共に同じ傾きを示しているが、玄室部では北壁に比べ南壁の方は垂直に近い。

つぎに床面を見ると、まず上部床面は、よく堅められた赤褐色土層に10cm前後の板状の石を玄室部全面と狭道部に敷きつめており、かなり丁寧な仕事をしていることがわかる。狭道部にみられる閉塞石は、南壁側で玄室から2.5m、北壁側で3mの所を斜めに20cm前後の石を並べており、この外側には敷石は全くみられない。この上部床面は下部床面から約30cm上にある。下部床面は地山を平らに整形し、その上に上部床面と同じような敷石を施しており、狭道部にはやはり閉塞石を置いている。なおこの上下床面に施している敷石の材質は石室石材と同じチャートである。

出土遺物 古墳時代の土器類はすべて須恵器であり、杯・蓋・高杯・長頸壺・脚付長頸壺がある。このうち杯(1)及び蓋(2・3)が下部床面出土のもので他は上部床面出土のものである。他に上部床面から鉄釘17本(1~10), 銀環5個(15~19)が出土しており、下部床面から鉄錠4本(11~14)が出土している。これ以外の遺物としては、石室埋土から平安時代から鎌倉時代の土師器・瓦器などが出土している。

〔遺物出土状態〕 上部床面では玄室より杯・蓋・脚付長頸壺及び鉄釘・銀環が出土しており、また羨道部からは杯・高杯・長頸壺及び鉄釘・銀環が各々床面直上から出土している。それぞれの出土状態をみると、玄室の須恵器は両袖石のほぼ中央の位置から杯(4)と蓋(5)とが並んで出土しており、その近くからは脚付長頸壺(9)が出土している。杯は完形であったが蓋はかなり細かく割れていた。また北側袖石付近から蓋(6)が出土した。玄室内では木棺に使用されたとみられる鉄釘が16本と銀環(15・16)が出土している。鉄釘は北壁から10~20cmの位置に主軸に沿って出土しているので、元位置に近い出土状態といえるが、木棺の大きさを推定するまでには至っていない。

羨道部出土の遺物は、玄室との境から約90cmの石室中心線上に杯(8)が口を伏せた状態で出土しており、その北壁寄りで長頸壺(10)、また玄室との境から1.8mの北壁寄りで杯(7)がこれも口を伏せた状態で出土している。また閉塞石の部分では高杯(11)が横倒しの状態で出土している。さらにつきこの羨道部からも鉄釘1本と銀環3個(17~19)が出土している。

下部床面出土の遺物は、須恵器の杯(1)と蓋(2・3)、及び鉄錠4本がある。これらの遺物はすべて玄室の敷石上より出土している。杯と蓋は奥壁付近の中央部にあり、杯のみが完形であった。鉄錠はすべて錫身を奥壁に向かって出土している。

〔出土遺物〕 杯(1・4)は(7・8)に比べ口径が大きく(4)で径12.8cm、器高4.2cmを測る。また(7)は径11.1cm、器高3.5cmである。(1・4)はたちあがりが低く内傾し、端部は丸くおさめている。(1)の底部は丸く仕上げ、(4)は底部中央付近を平らに仕上げている。底部外面は共に粗いヘラケズリを施している。(7・8)はたちあがりが非常に低く、断面は三角形を呈しており、受け部は外方へのびる。底部は平らな面をもっており、外面は回転ヘラ切りのまま未調整である。

蓋 口径の最も大きいものは(6)の14.8cm、最小は(2)の14cmである。天井部は全体に丸味をもって仕上げ、3分の2ほどヘラケズリを施している。(2)は天井部と口縁部とを分ける稜はないが、口縁端部を外方へつまみ出し内側に浅い凹面をつくり出している。(3・5)は天井部と口縁部とを分ける稜のところに凹線をめぐらしている。(3)には口縁部内面にも

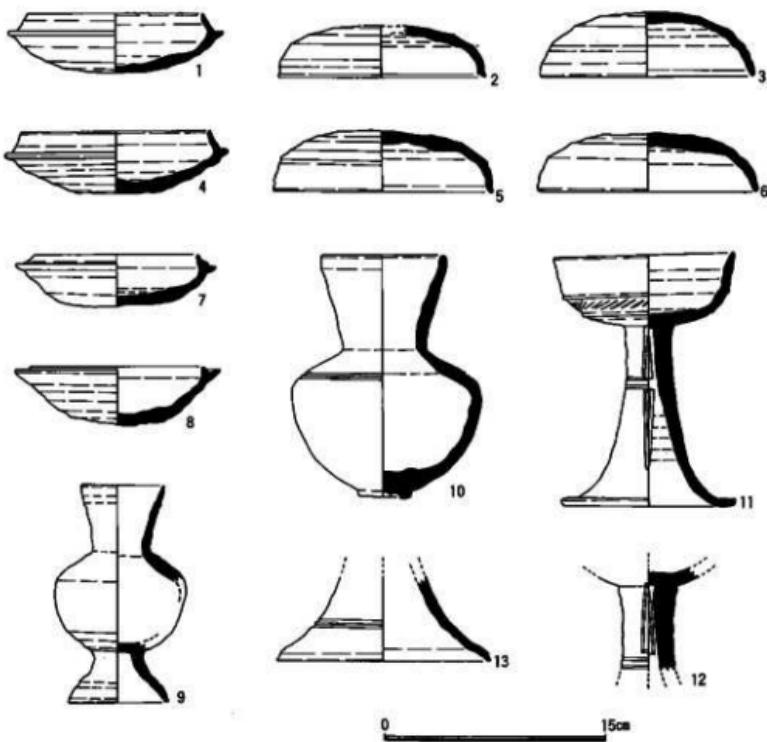


図10 出土土器実測図

浅い凹線をめぐらし、(5)は端部を外方へつまみ出している。

高杯(11・12) (11)は裾部の大きく広がる長脚の無蓋高杯で、2方向の2段透しがある。杯部には2条のつまみ出し凸帯の間に列点文を施している。なお(12)は無蓋高杯か有蓋高杯かは不明である。

長頸壺(10) 本来脚付であったものを、破損などにより、低い高台として使用したものである。最大径は12.8cmで肩部にある。頸部は外側へ開き口縁付近でやや垂直にのび、端部は丸くおさめている。肩部近くには2条の凹線を持つ。

脚付長頸壺(9・13) (9)は(10)に比べかなり小型のものである。最大径は8.9cmでやはり肩部にある。(13)は壺の脚部と思われるが、色調・胎土が異なるため長頸壺(10)とは別個

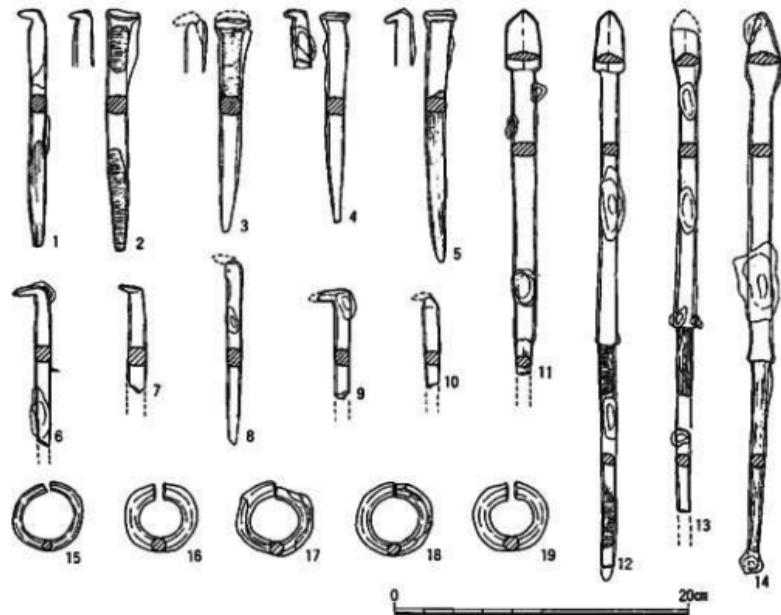


図11 鉄器・銀環実測図

体のものである。

鉄釘(1~10) 鉄釘は総数17点出土している。そのうち1点は蓋道部から出土しており、他はすべて玄室内から出土している。頭部の残存するものは、すべて折り曲げて平らな面を作り出し、一方を尖らしたものである。長さはほとんどが8cm前後で、断面は5~8mmを測る。これらの鉄釘の中には木質の遺存により木目の方向・板材の厚さを観察できるものもある。この木目の方向による種類は、頭部近くに横方向の木目、それ以下が縦方向の木目のもの(A類)。頭部近く及びそれ以下ともに横方向のもの(B類)。頭部及びそれ以下がともに横方向の木目であるが、それが直交するもの(C類)の3種に分類することができる。このA~C類でそれぞれ確実に判別できるものとして、A類が(1・5)、B類が(2)、C類が(3)である。さらにこれらの鉄釘から判断して使用された棺材の厚さは約3cmの値を得ることができた。

鉄錐(11~14) 出土した鉄錐は全て下部床面の玄室内出土のものである。総数は4点で、その形態は、闊がなく錐身の断面がややぶ厚いもの(13・14)と、闊をもち錐身のやや薄いも

の(11・12)とに分けることができる。全長をとどめるものはなかったが(12・14)はそれぞれ19cmを測る。鐵身にはすべて両側に刃をもち、頸部と茎部との境は棘状突起はもたないものの厚さのちがいにより明瞭である。茎部は(12・14)で観察すると縦方向の木目の内側に横方向の繊維の筋がみられる。この繊維は矢柄と接合した際、すべり止めの役目を果たしたものと考えられる。

銀環(15~19) 銅地に銀貼りをしたいわゆる銀環である。総数は5点であり、すべて上部床面から出土している。(16~19)は最大径が2.5~2.6cmで、断面は径5mmを測りほぼ同寸大である。ただ(16~19)は突合せ部の隙間が2mmあるのに対し、(17~18)の突合せ部は接している。(15)は最大径2.4cm、断面径3mmを測り、他4個に比べ細身である。この銀環(15~19)のそれぞれの重量は15~2g, 16~9.5g, 17~7.8g, 18~7.6g, 19~9.2gである。この5個の銀環のうち(17~18)はかなり表面が破損し、縁背がふき出しているが、他の3個の遺存状態は表面が錆びついているものの比較的良好である。なお、これらの銀環の中で対をなすものをさがすとするならば、その法量・形態からみて、(16)と(19), (17)と(18)をあげることができる。ところがこれらの出土地点はかなり離れており、もしこの対をなすものが確かであるとすれば、これらの銀環はほとんど元位置をとどめていないものと思われる。

小結 音戸山1号墳の墳丘規模は現状では測りようがなかったが、推定では直径14m、墳丘高3mの円墳と考えられ、その石室は両袖式の横穴式石室であった。

今回の調査で、この石室の床面は古墳築造当初の面と、さらにそこから30cmほど土を盛って上部床面を造り出していること、またこの上下床面には共に敷石を施していることなどが明らかとなった。この下部床面から上部床面までの埋土は、あきらかに自然流入ではなくて、人工的に土入れを行ったものである。

この上下床面は、その出土遺物からみた場合、若干の時期差が認められる。下部床面から出土した須恵器は杯と蓋のみであるため、同様に出土した上部床面の杯・蓋と比較すると、上部床面出土の杯(4), 蓋(5)などは下部床面の土器とほぼ同形式と考えられるが、杯(7・8)に関しては、受部のたちあがりが非常に短かいこと、外面底部が回転ヘラ切りのまま未調整であることなどから時期が新しいものと考えられる。これらの土器から上下床面の構築年代を判断すると、下部床面は6世紀末葉、上部床面は7世紀の前葉と考えられる。

また出土遺物により棺の種類を推定すると、上部床面では多数の鉄釘の出土により、木棺が考えられるが、下部床面に関しては棺の種類を推定する何らの資料も得られなかった。下部床面の棺及び副葬品の大半は追葬の際かたづけられたものと思われる。

2 音戸山3号墳

墳丘 調査開始時にはすでに墳丘に土が盛られていたので、重機を使って元の墳丘の状態に戻すことから作業を始めた。盛土を取り除いた状態で墳丘測量を行い、一辺約13m、高さ約1mの方墳状の墳丘が明らかになった。墳丘の南辺部は東西方向の道路によって切られていたが、この断面では石材等は検出できなかった。

墳丘の構築状態を調べるための断ち割りトレンチは、当初、東・西・北の3方に設定したがそのいずれもで周溝を確認した。しかし、これでは墳形が円墳か方墳かを決められないため、斜め方向の4カ所にもトレンチを入れて周溝の確認を行なった。その結果、すべてのトレンチでこれを確認し、本墳が周溝心々で約13mを測る方墳であることが確実となった。

墳丘を構成する封土は現状で50m程残存していた。その内訳は主に地山の赤褐色泥土層からなる封土(I)と、赤褐色泥土層の下層に堆積する明褐色泥土層を主体とした封土(II)に

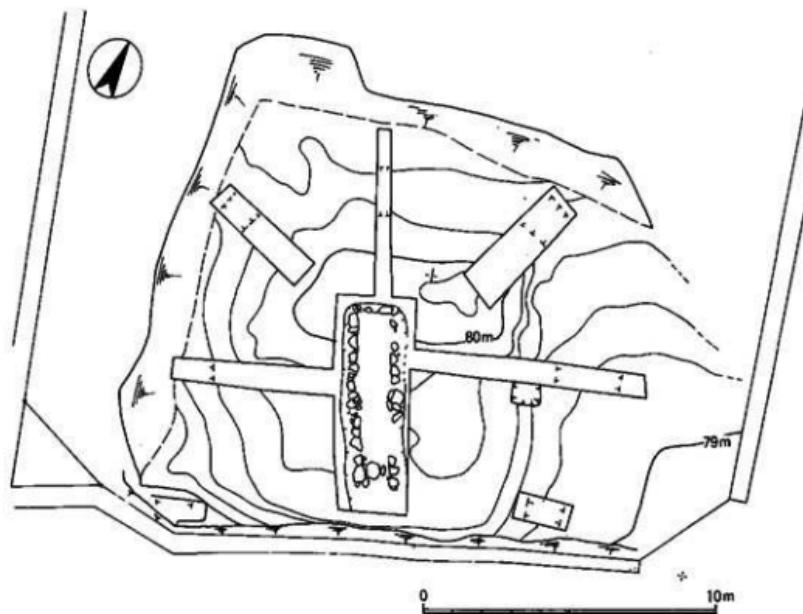


図12 3号墳墳丘測量図(1:200)

大別でき、この2層が交互に積み上げられている状態を観察することができた。しかし、石室部分の上面には石材を抜き取る際の擾乱層があり、封土と石材の対応関係は十分明らかにすることはできなかった。断ち割りトレンチのすべてで検出した周溝は、幅1.3m～2mを測り深さは大部分が1m以内であった。しかし北トレンチではその幅が最も広く2mを測った。埋土は褐色泥土層であった。

なお、北トレンチでは周溝埋土の最上層に砾群があり、この中には平安時代前期に属する土器が含まれていた。周溝の埋没年代を知る手がかりとして興味深い。

内部構造 3号墳の主体部は南北東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。現状で全長6.1mあり、石室幅は奥壁付近で1.25m、開口部で1.05mを測る。敷石面は奥壁から南北へ3.3m付近まであり、拳大のチャートが敷きつめられていた。また、奥壁より5m南の位置には石材が2個据えられており、羨道閉塞の一種と考えられた。

石室に使われた石材の種類は大部分がチャートである。石材の大きさは、長さ50cm、幅20cm～30cm程のものが最も多く、これを横積みにしてわず

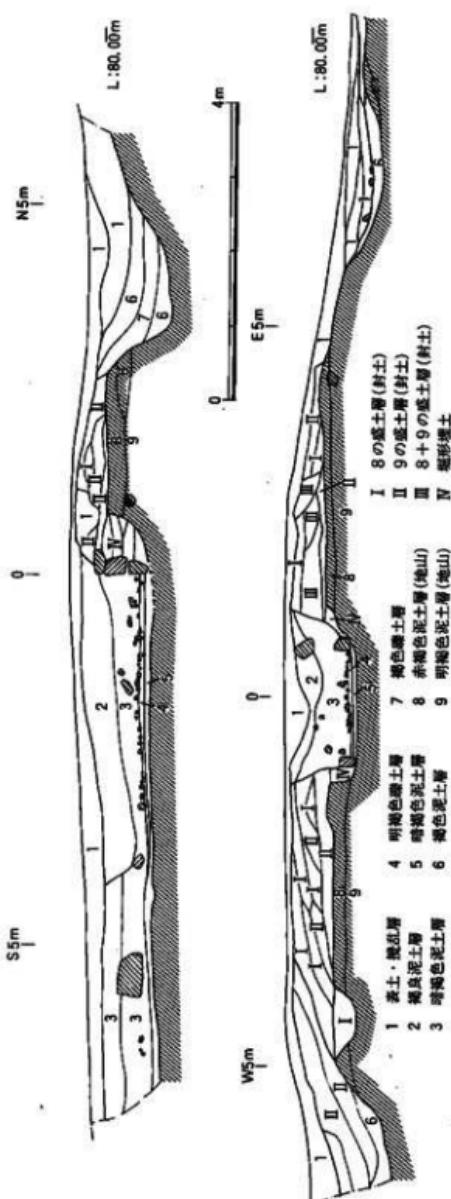


図13 3号墳墳丘断面図(1:80)

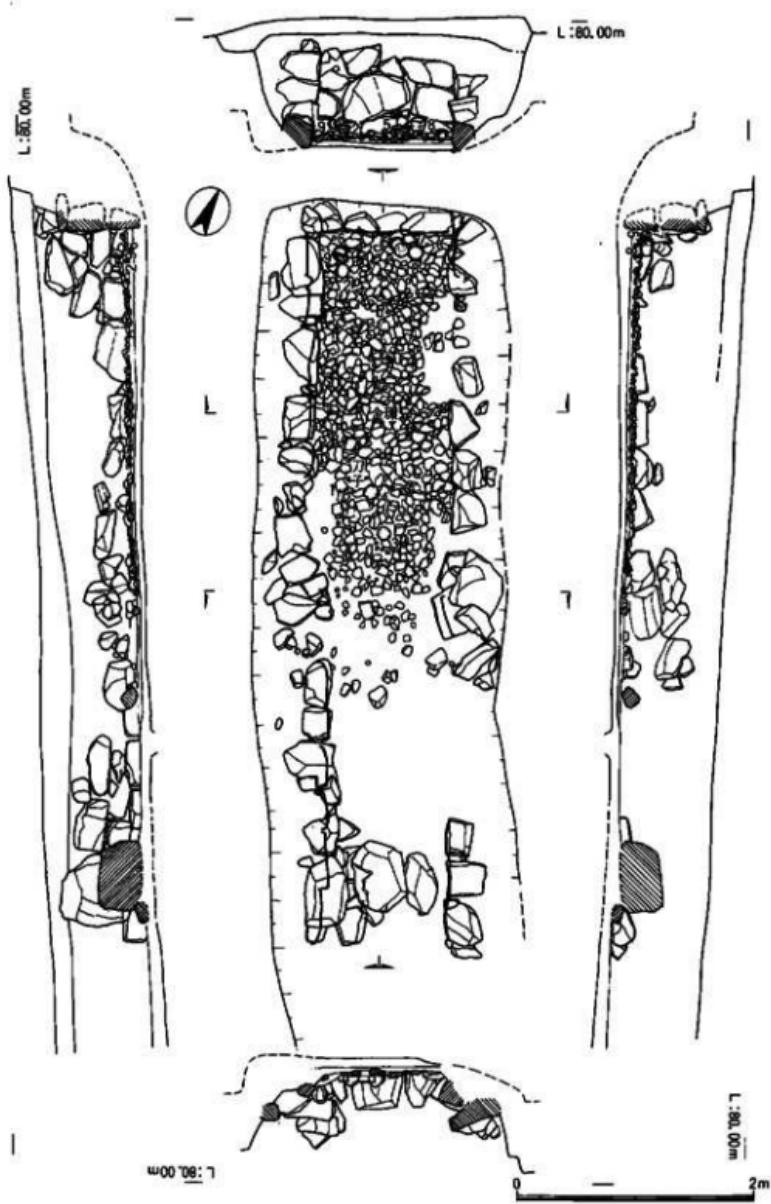


图14 3号墓石室实测图(1:50)

かに持ち送りをもって積み上げられていた。

石室の遺存状態は悪く、わずかに奥壁付近で最高3段目までを数えることができた。側壁の石材は大部分が抜き取られており、特に東と西の袖石に相当する箇所では元位置をとどめる石材は認められなかった。

石室掘形は東・西・北の3方の断ち割りトレンチで検出した。いずれも赤褐色泥土層より切り込んでいる。東西両トレンチによれば、その幅は約2.4m、深さ30cmを測る。

出土遺物 石室内から須恵器9点(杯4・蓋2・高杯1・短頸壺1・横瓶1)と金環1個、刀子1本と平安時代の土師器皿1点が、また周溝より平安時代の土師器・須恵器・綠釉陶器等が出土した。

(遺物出土状態) 石室内では、石室の中央部(玄室に相当する部分)では遺物がみられず、奥壁付近と中央部の南側の2カ所から須恵器が出土している。

奥壁付近の遺物は東西両壁とのコーナー部に各々3個づつ集められた状態で出土した。西の一群は杯(6)・蓋(2)・無蓋高杯(9)からなり、東の一群は杯(5)・短頸壺(7)・横瓶(8)からなる。横瓶の胴部が二分されていたり、高杯が横倒しであること、さらには杯や蓋が口を上に向けて床面からやや浮いた状態で出土したこと等を考慮すると、これらの土器群は石室内で2次的に移動させられた可能性がある。

次に、中央部の遺物の空白箇所を挟んだ南側では杯(3・4)、蓋(1)が出土したが、これらの土器群は床面に貼り付いた状態で口を下に向けて出土している。

(出土遺物) 古墳時代の土器類はすべて須恵器で、杯・蓋・無蓋高杯・短頸壺・横瓶がある。以下、その概要を述べる。

杯(3~6)、蓋(1・2)では、口径がやや大きく天井部に難なヘラケズリをとどめる一群(2・5・6)と、全体がさらに小型化しヘラケズリのみられない一群(1・3・4)の2種類に分けることができる。前者の一群は焼成状態が悪く、色調も黄灰色を呈するが、後者の一群は極めて焼成状態が良く、色調も青灰色を呈している。

短頸壺(7)は口縁部の歪みが著しく、6.3~8.1cmまでを測る。体部最大径は13.9cm、高さは9.2cmである。胴部上半に1条の凹線をめぐらせ、底部はヘラケズリしている。

高杯(9)は無蓋で、口径11.4cm、高さ15.3cmを測る。脚部には2段透し孔を2方に穿つ。杯部には2条の凸線以外文様は施されていない。

横瓶(8) 口縁部径7.3cm、胴部の長径13.2cmを測る。端部の一方はヘラケズリしている。長胴型の体部を製作した後、胴部の一ヶ所を割り抜いてここに口縁部を付け、最後に一方

の口を粘土板で塞いで製作したものと思われる。

金環、直径6mm程の銅芯を径3.5cmの円形に曲げ、この上に金箔を貼りつけている。金箔の保存状態が極めて悪いため図示できなかった。

刀子、長さ4.4cm以上、幅8mmの小型の刀子である。柄の一部を欠損している。

以上の古墳時代の遺物の他、石室内からは平安時代中期の土師器皿が、北トレンチの周溝埋土上層からは平安時代前期の土師器高杯・須恵器瓶子・縁袖陶器鉢・灰釉陶器碗等が出土している。

小結 3号墳は墳丘の各所に入れた断ち割りトレンチによっ

て方墳であることが確認できたが、これは1つの古墳群の中に円墳と方墳の両方がみられる事を明らかにした点で重要な事である。内部構造は無袖式の横穴式石室である事が明らかとなったが、石室の形態で注目されるのは開口部にみられた羨道閉塞の一種と考えられる石材の存在で、これを発展させれば横穴式石室の系譜上にある小型の石室に移行する可能性があるだけに、その過渡的な形態として興味深い。次に、本古墳は石室内から出土した須恵器によって、7世紀前半の築造と考えられたが、上記の石室の形態や出土遺物の配置からみて、追葬が行われたとは考えがたく、当初から単次葬であった可能性が高い。この他、石室内や周溝上より平安時代の土器が出土し、古墳の埋没時期を知る手がかりを得た。

なお、地元の人の話ではこの3号墳の南に横穴式石室を有した古墳が1基存在したとされ、本古墳との関係が注目されるところである。

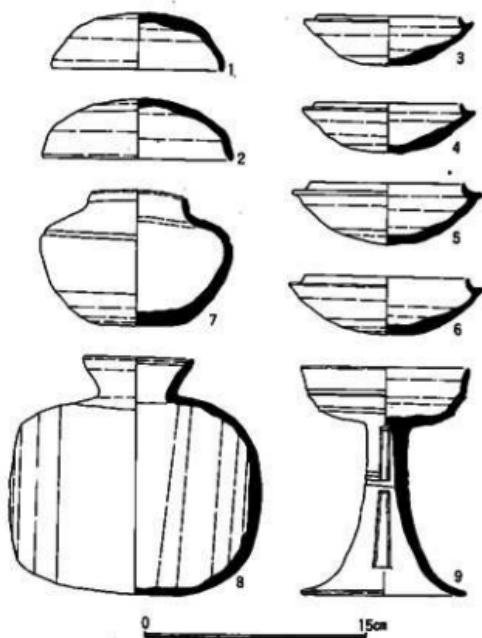


図15 出土土器実測図

3 音戸山4号墳

墳丘 4号墳は本古墳群の最北部の一群中、最も東端に位置している。

調査前、径約15m、高さ約2mの円墳状を呈しており、墳丘の東半分は道路の拡幅時に削平された状態であった。また、墳丘の西南部も最近の造成工事によって削平を受けており、断面に封土がみられる状態であった。

墳丘の規模や構築を知るための断ち割りトレンチは、墳丘の北・北西・西・南西方向に4本設定した。トレンチ断面において土層観察を行なったところ、各々のトレンチで周溝を検出し、この結果本墳が径18mに及ぶ群中最大規模の円墳であることが明らかになった。

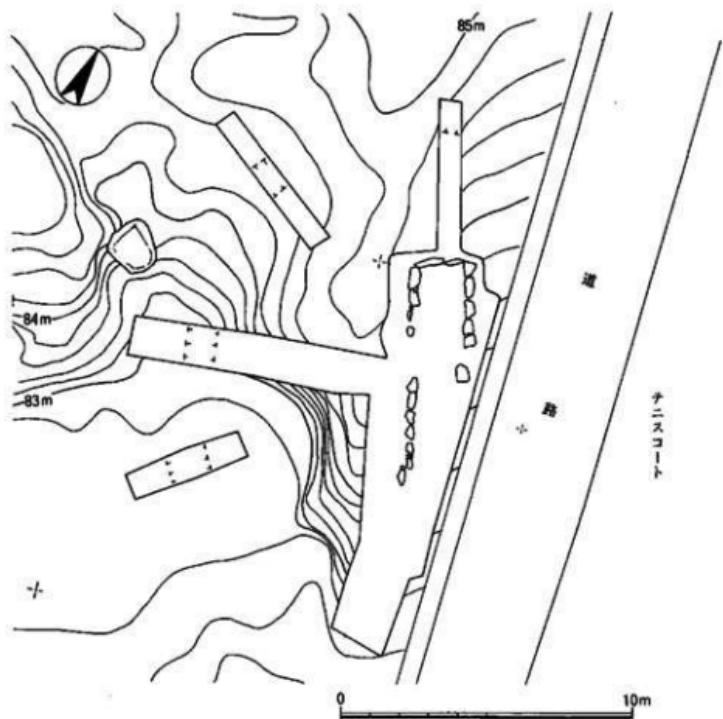


図16 4号墳墳丘測量図(1:200)

封土は現状で最高1.4m程度残っていた。封土の状態は3号墳とほぼ同じで、地山の赤褐色泥土層を主に含むI層と、同じく地山の明褐色泥土層を主とするII層が互層となって盛られていた。特に4号墳ではI・IIの両層の色調差が顕著で、このため封土を分層して観察する作業は比較的容易であった。しかし、石室石材と封土の対応関係については、石室部分が搅乱を受けており、また土層観察も十分果せなかつたため、ここでは明らかにすることはできなかつた。

各々のトレンチで検出した周溝は、幅1.0~1.4m、深さ20~30cmと小規模で、埋土は褐色砂質土層・黄褐色土層であった。

なお、北・北西方向のトレンチでは周溝埋土の上面に厚さ約70cm以上に及ぶ最近の盛土層が認められた。

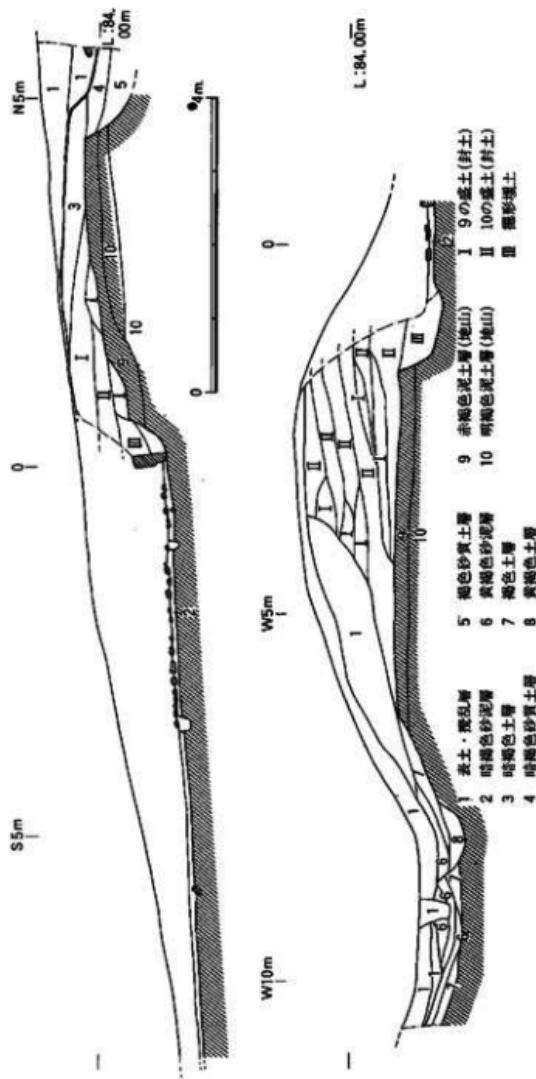


図17 4号墳墳丘断面図(1:80)

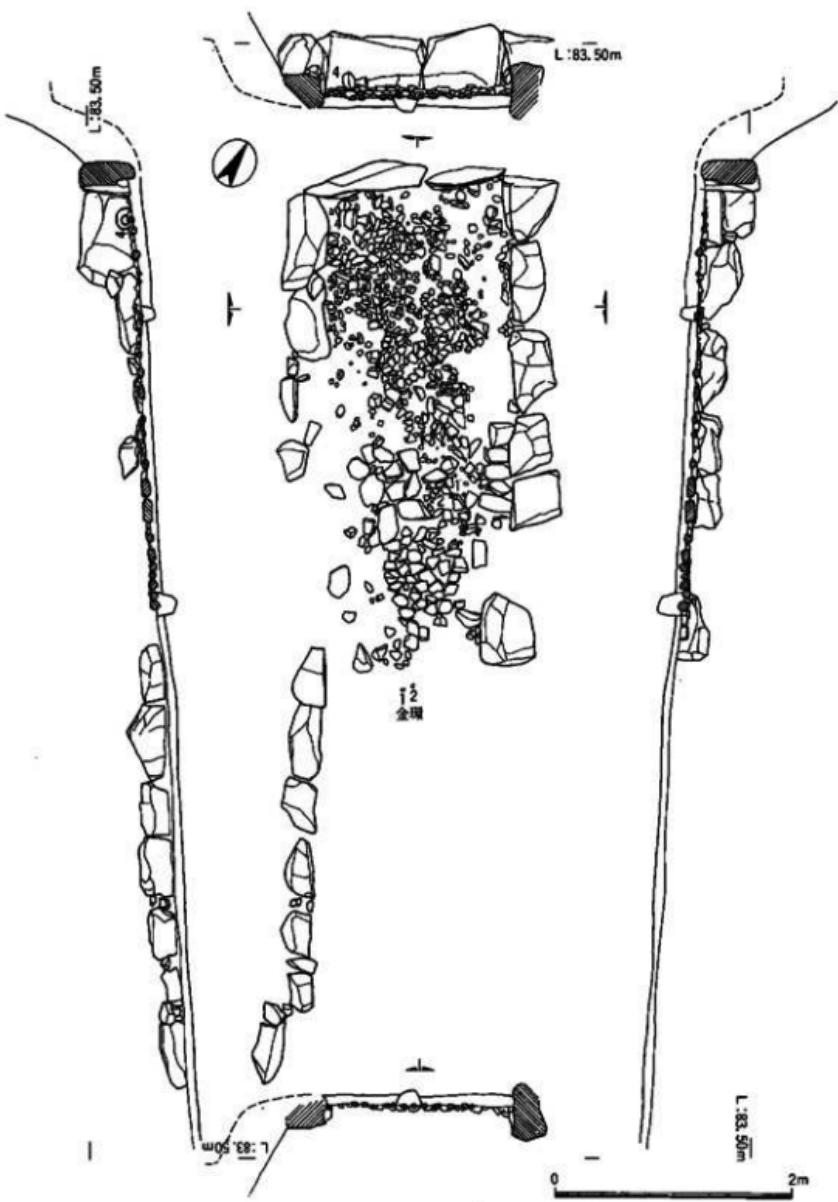


圖18 4號墳石室實測圖(1:50)

内部構造 内部構造は横穴式石室であるが、石材の抜き取りが著しく、石室自体の残り具合は良好でない。奥壁より3.4m南の東壁に東袖石に相当する石材があり、これを生かせば片袖式の横穴式石室ということになる。現状で、玄室幅1.58m、羨道長3.4m以上、羨道幅1.15mを測る。

床面は奥壁より4m付近までが敷石面である。敷石に用いられた石材は一様でなく、奥壁より2m付近までが小礫、2mから3m付近が長さ20cm前後の比較的大型の板石、それより南側は長さ10cm前後の角礫が敷きつめられていた。板石の敷き方は大部分が無縫作に敷かれていたが、一部東壁沿いでは長軸を東西に5個並べた状態のものもみられた。

石室に使用された石材の種類はすべてチャートである。長さ50~60cm、幅30cm前後のが多く、これを横積みしている。しかし、奥壁や西壁最奥部の石材は立てた状態で用いられており、石材のもつ平坦面を強調したものと思われる。石室石材については大部分が抜き取られていたため、石材の組み方等は復原できなかった。

なお、石室掘形は北・西の2つのトレンチで検出し、3号墳同様赤褐色泥土層より切り込むことを確認した。

出土遺物 石室内から須恵器4点(杯1・蓋1・高杯1・長頸壺1)と金環2個が、また西南トレンチより須恵器壺が出土した。

(遺物出土状態) 石室内の遺物は玄室中央部ではなく、その南北で出土した。奥壁と西壁のコーナー部分には長頸壺(4)が横倒しの状態で出土した。高杯(3)は西壁沿い、杯(2)と蓋(1)は奥壁より2.4mの位置で破碎された状態で床面に貼り付いて出土している。金環は2個とも奥壁から4.15mの位置にあって、敷石の範囲からはずれる位置で出土している。

(出土遺物) 杯(2)と蓋(1)はともに法量が小さく、調整手法としてのヘラケズリもみられない。焼成良好で堅く焼けしまっている。

高杯(3)は無蓋で、口径9.5cm高さ9.9cmを測る小型のものであるが、脚部には凹線をとどめている。脚部のすかし孔は2方向にありよく貫通している。

長頸壺(4)は口縁部径9.2cm、胴部

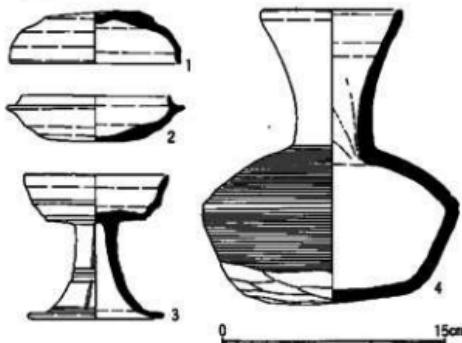


図19 出土土器実測図

最大径17.4cmを測る。器壁が厚いため全体に重々しい。胴部外面にカキ目を施し、こののち底部付近を回転を利用しないヘラケズリで調整している。

金環(1・2)はともに同じつくりと大きさをもち、対をなすものである。表面の金板の残り具合は極めて良好で、突合せ部にはこれを絞った様子がよく観察できる。表面の金板は厚みがあり、今日もなおその輝きをとどめる優良品といえる。重量は1が22.6g、2が21.7gを計る。

この他、西南トレンチの周溝埋土より古墳時代の須恵器甕が出土している。

小結 4号墳は調査の結果、径18mに及ぶ円墳であることが判明し、本古墳群の中では最大規模の墳丘を有することが明らかとなった。しかし、墳丘・石室はともに残り具合が悪く、特に内部主体の横穴式石室は石材の大半が抜き取られ、最下段のものをかろうじてとどめるにすぎなかった。

4号墳の横穴式石室は片袖式の可能性があるが、その規模は無袖式の3号墳・5号墳よりもひと回り大きく、むしろ両袖式である1号墳との間に位置するものといえる。使用石材が比較的大型であるのもこの点と関連するであろう。一方、出土遺物からは7世紀前葉に本古墳が築造されたことが予想されるので、本古墳群の中でも新らしい段階の築造と考えられ、こうした時代に群内で最大規模の古墳が築造せられた点は興味深い。

4 音戸山5号墳

墳丘 この5号墳も調査開始時にはすでに重機によって墳丘の南端部が削平されており、断面に石室の側壁や敷石面、あるいは石室掘形等が確認できる状態であった。墳丘は調査前の現状で一応径約15m、高さ2m余りの円墳と思われ、特に丘陵側の古墳北裾部では周溝の痕跡と考えられる窪地が弧状に5号墳を取り巻く様子が明瞭に観察できた。また、墳丘上と東裾部には天井石と考えられる大形石材があって、本古墳の主体部が天井石をもつ横穴式石室であることが予想できた。

墳丘の調査は、北・南・東・西および北東方向に断ち割りトレンチを入れ、断面での墳丘の構築状態や周溝の確認調査を実施した。その結果、南トレンチを除くすべてのトレンチで周溝を検出し、これを復原すると本古墳が径15mの円墳であることが判明した。

封土の残り具合は比較的良好で、現状で高さ約1.3m分をとどめていた。その盛り方は基本的には先に記した3・4号墳と同様、地山の赤褐色泥土層を主とするI層と同じく地山

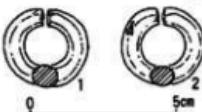


図20 金環実測図

の明褐色泥土層を主とするII層に分層できたが、北や西のトレンチ断面ではこれとやや異なった黄灰色泥砂層(15)や淡黄色泥砂層(16)、黄色泥砂層(17)等、全体に黄色系の泥砂層がみられた。

石材と封土との対応関係については東壁で3段目までの関係を確認することができたが、これによれば石材の据え付けと盛土の工程が交互になされたことが観察できた。

周溝は南を除くすべてのトレンチで確認した。いずれの箇所でも幅が広いわりに深さがなく、最も深い所で約40cmを測る程度である。埋土は3・4号墳と同様の黄褐色泥砂層であった。

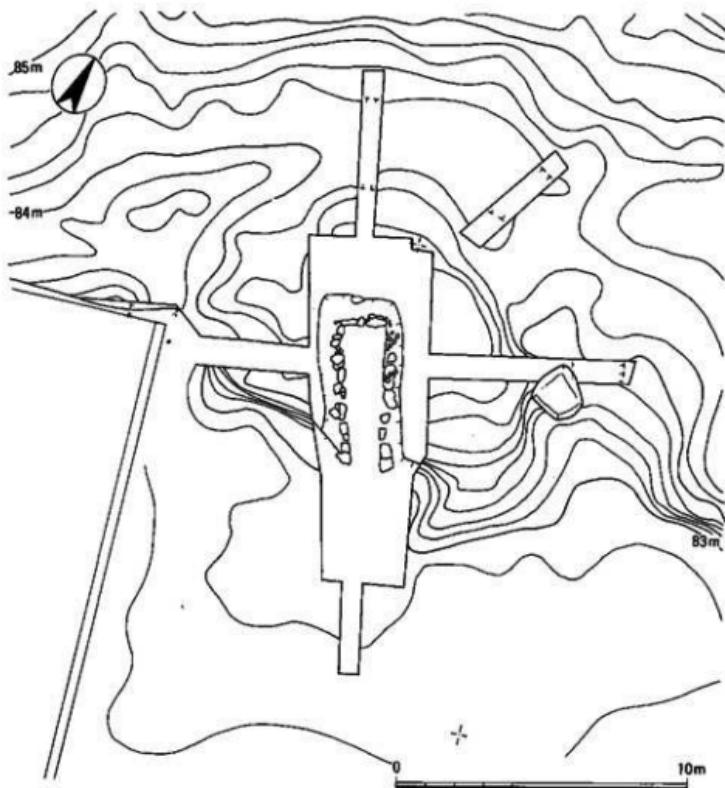
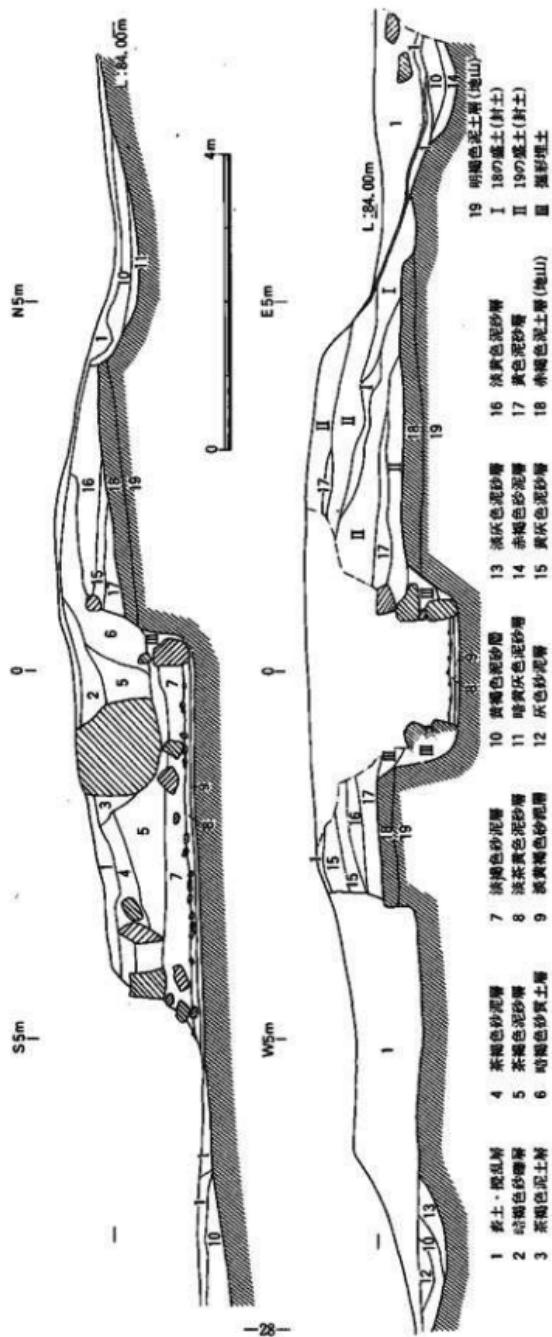


図21 5号墳墳丘測量図(1:200)



222 圖 5 号鐵道正斷面圖(1:80)

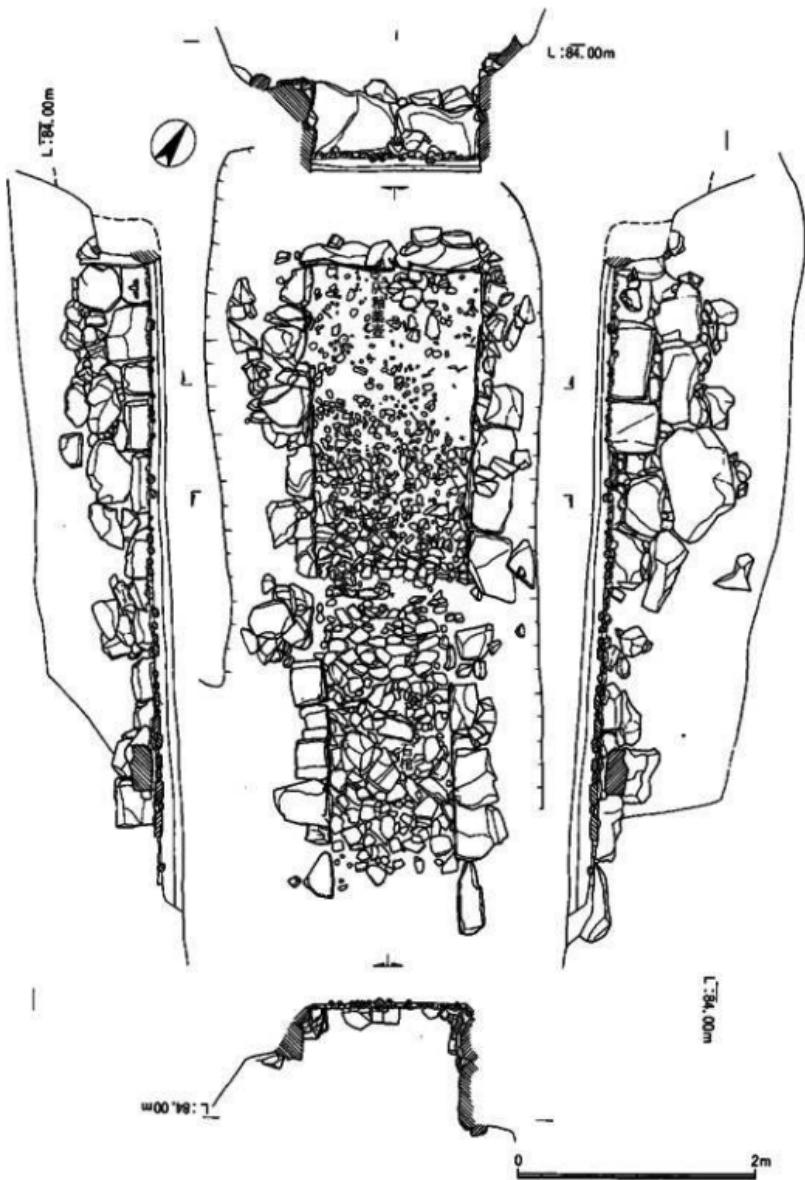


图23 5号填石室实测图(1:50)

内部構造 主体部は横穴式石室である。ただし、石室自体はかなり破壊されており、石室内は落下した石材や封土で充満する状態であった。調査が進む中で墳丘上の石材が元位置を失なっていることが確認できたので、これを吊り出してさらに掘り込んだところ、石室内部にも同様の大型石材を1個検出し、この古墳の石室が天井石をもつ構造であることが予想された。

検出した横穴式石室は無袖式に属するもので、南々東に開口している。現状で全長5.62mあり、幅は奥壁付近で1.42m、開口部で1.02mを測る。東西の袖石相当部分の石材はいずれも元位置を失なっており、特に東壁ではこの部分を境に若干石の並びがずれるので、袖石相当部の当初の状態が見られない点が惜まれる。

石室内の床面はすべて敷石面となっており、奥壁から開口部の端までみられる点は本古墳群中本例が唯一のものである。しかし、場所によっては敷かれた石材が異なっており、奥壁付近は小砾、奥壁から2.5m付近までは拳大の砾、さらにそれより南では長さ15cm程の板石が一面に敷きつめられていた。なお奥壁より2.75m南の位置に長軸を東西に向けた石材が1例に並べられており、これを境に床面のレベルも奥が一段高い状態を呈していた。これらの石材は石室内の区画を意識したものとして注目される。

石室に使用された石材は全てチャートであった。最下段の石材は比較的大きさや形の整ったものを用いており、東壁では2段目以上にやや大型の石材を積み上げている。石材の積み方は他の古墳同様平坦面を内に向けた横積みであったが、奥壁等は3・4号墳と同様厚みの少ないものを立てて使用している。

石室を構築するための掘形は、北・東・西の3方のトレンチで検出し、3・4号墳と同様赤褐色泥土層から切り込んでいる。東・西2つのトレンチによると、その幅は約2.8mを測る。ただし、掘形の切り込んでいる高さは、東に比べ西の方が高いことが観察された。

出土遺物 石室内から須恵器の破片12点と鉄器45点(釘42・刀子2・鎌1)、凝灰岩製の家形石棺片と平安時代に属する土師器皿・須恵器瓶子・灰釉蓋付薬壺・錢貨等が出土している。また南トレンチからも古墳時代の土師器長頸壺が1点出土している。

〔遺物出土状態〕 5号墳に伴う古墳時代の遺物は須恵器の破片と鉄器、石棺片並びに石室外で出土した土師器長頸壺である。このうち須恵器の破片と鉄器は石室床面を覆う埋土中に混在しており、いずれも元位置をとどめるものではないと判断された。家形石棺は石室の開口部に破碎された状態で出土した。比較的大きな破片2つ以外はいずれも小片が層状を呈し、これが石室床面の敷石を覆っていた。平安時代の遺物は石室の床面から古墳時代の

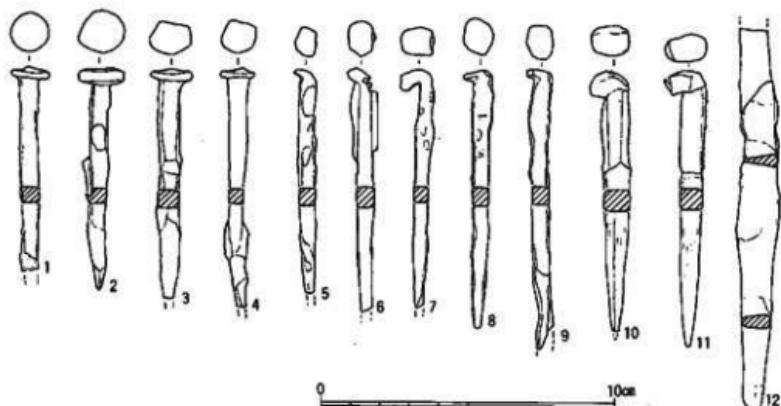


図24 鉄器実測図

遺物と共に出土している。なお、灰釉の蓋付茶壺は石室の奥壁寄りで割れた状態で検出されたが、床面からは若干浮き上った状態であった。

〔出土遺物〕鉄器は合計45点ある。内訳は釘42点・刀子2点・鎌1点である。

鉄釘は木棺材を固定するために使われたものとみられる。今回出土のものは頭部の形状で3種類に分類できた。即ち、I類：円形の頭部をもつもの(1～4)，II類：やや平坦な頭部をもつもの(5～9)，III類：折り曲げただけの頭部をもつもの(10・11)の3類である。量的にはI類とII類が同じほどあり、III類が最も少ない。断面は6～8mmを測るが、長さについては完形品が少なく、十分計測できなかった。鉄釘に付着した木質は先の1号墳同様A・B・Cの3種類が認められた。確認し得た各々の内訳は、Aが(10・11)，Bが(7)，Cが(8)で、残りのものは木質の遺存状態が悪く判別できなかった。なお、A・B類の木質方向から、棺の厚さは2.6cm程度と推定できた。

刀子(12)は長さ10.1cmを測る完形品である。裏に別の個体が融着している。

石棺(1・2)はともに凝灰岩製の家形石棺と思われるものの破片である。(1)は蓋石のコーナー部分と考えられ、平坦な天井部から下り棟に相当する稜線がよく残っている。内面には側石を組み合す際の段がある。(2)も同様の蓋石の破片で、同じく内面に段をもっている。これらの石棺破片はその型式的特徴から、家形石棺の中でも比較的新らしい部類に属するものと思われる。

〔石棺の石材〕石棺の一部であるという岩石は肉眼観察で凝灰岩であることがわかる。この凝灰岩は風化に大変弱くなっている。凝灰岩の構成礫種は黒色の松脂岩・流紋岩・パミスで、わずかに柘榴石がある。同種の岩石は平安京内の東寺や西寺跡の調査でしばしば出土しており、また、平安宮内で出土する凝灰岩もこれまでに確認しているものはすべてこの種のものである。

この凝灰岩は通常玻璃質集塊凝灰岩とよばれるもので、その産地は奈良県と大阪府の境にある二上山のドンズルボ付近であることが確認されている。

ところで、従来から嵯峨野地域で発見されている家形石棺の材質は、そのいずれもが播磨地方で産出されるいわゆる竜山石とされており、当研究所が調査

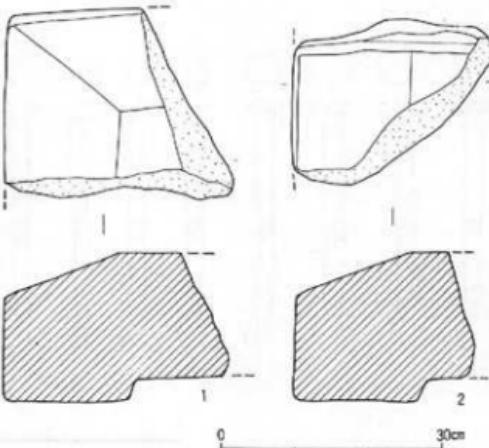


図25 石棺実測図

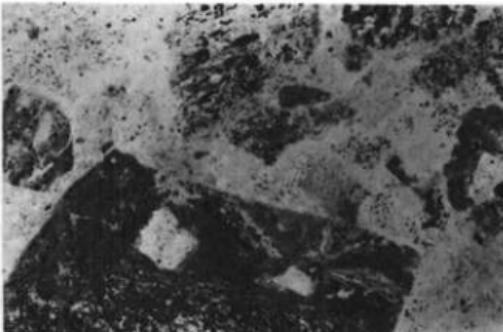


写真1 跳微鏡写真(×40)

した双ヶ岡1号墳や御堂ヶ池1号墳出土の石棺についても同様の結論を得ている。この点で今回の出土資料は明らかに二上山産と確認できる唯一の例である。

灰釉蓋付薬壺(1・2)は完形品である。薬壺の本体(2)は口縁部径10.2cm、高さ21.3cm、胴部最大径23.2cmを測る。胴部は丁寧にヘラケズリされており、肩部には浅い凹線が3条確認できる。底部はヘラケズリした後、高台を貼り付ける。淡黄緑色の釉は胴部上半にのみかかっている。

同蓋(1)は、口径13.9cm、高さ4.1cm、天井部はすべてヘラケズリされている。本体と同色の釉が外面にかかっている。

以上の2点は極めて丁寧に作られた優品であり愛知県猿投窯の製品と考えられる。

小結 5号墳は墳丘に入れたトレンチによって、径約16mの円墳であること、また主体部の調査によって無袖式の横穴式石室をもつ古墳であることが明らかになり、さらに、墳丘上や石室内にみられた大型の石材によって、本古墳の石室が天井石を構架させる構造であることも予想された。一方、床面に関しては開口部まで敷きつめられた板石の存在や、無袖式でありながら玄室相当部を意識するかのように並べられた床面の敷石等の存在が注目された。

出土遺物に関しては古墳造営時に副葬された土器類がほとんど出土しておらず、本墳の年代決定に大きな障害となったが、開口部で出土した家形石棺の破片や40本以上におよぶ鉄釘等から本墳には家形石棺や木棺が納められていたことが明かとなった。

さらに奥壁付近で出土した灰釉蓋付薬壺は、その中に人骨が含まれていたことから骨蔵器として用いられたことは明らかであり、石室内から出土した同じ平安時代前期の土器類と合わせると本古墳の石室はこの頃まだ開口状態にあり、当時の貴族層を対象に流行した蔵骨器の埋納に絶好の空間を提供したものと考えられる。

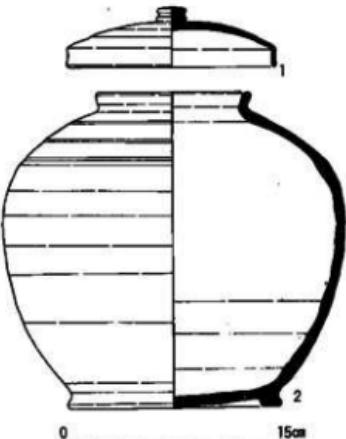


図26 出出土器実測図

第III章 まとめ

今回の調査では4基の古墳を発掘調査し、墳丘や内部構造、出土遺物等について貴重な成果を得ることができた。以下、これをまとめておこう。

古墳群の立地 音戸山古墳群は嵯峨野地域の背後を画する東南東方向の細長い丘陵の端部に位置しており、こまかくみればこの丘陵の南及び東南方向斜面に立地することができる。この丘陵の東側には小さな谷地形が形成されており、最近まで擂鉢池としてその地形をみることができた。1号墳・2号墳はこの擂鉢池に面した丘陵の東斜面に立地しているが、こうした古墳の立地条件が石室の開口方向に大きな影響を与えたことは容易に想像できよう。

支群の群構成 今回の調査で新たに2基の古墳を発見し、本支群が合計8基以上からなることが明らかとなった。その範囲は南北約220mにわたっているが、その群構成を復原すると、現状では1・2号墳、3号墳、4・5・6号墳、7・8号墳の4つの群を想定するのが妥当と考えられる。このうち3号墳については現状では単独であるが、かつてはこの南側に石室を有した古墳が存在した伝えもあり、この点を考慮すれば各々の群は複数の古墳で構成されていたとみるのがよかろう。

なお、「京都市遺跡地図」(1980年)では丘陵頂部のものや西側谷筋のものも一括して「音戸山古墳群」として取り扱っているので、今回調査のものはこのうちの東の支群に相当するものとしておきたい。

墳丘 調査の結果、1号墳・4号墳・5号墳が円墳、3号墳が方墳であることが明らかとなった。支群中最大の墳丘を有するものは4号墳で、直径約18m、高さ2m余を測るが、その他のものは直径13~15m、高さ1m前後の墳丘をもつとにどまっている。なお、7・8号墳は現状では方墳と推定される。

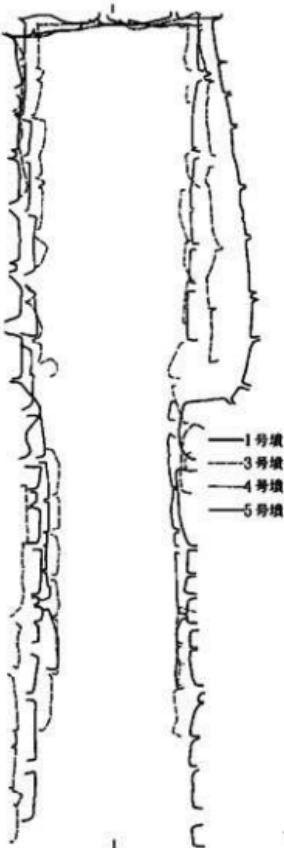


図27 石室床面の比較図(1:50)

横穴式石室の特色 調査した古墳の内部構造はすべて横穴式石室で、この中には両袖式（1号墳）、片袖式（4号墳）、無袖式（3号墳・5号墳）の三型式がみられた。石室の床面平面図を重ね合せその形態を比較してみると、まず石室規模では両袖式の1号墳が最も大きく、次いで片袖式の4号墳、以下無袖式の5号墳、3号墳の順で小さい。最下段の石材は1号墳の北壁例を除いては玄室・後道を問わず直線的に並んでいるが、これは石室の構築に際してまず墓括内に割り付けを行ない、これに従って最下段石を据え付けたことを示すものであろう。

石室企画については、3号墳と5号墳の平面形態の類似をあげることができる。両者の石室を比較した場合、5号墳の石室幅が若干広い点を除けば両者はよく一致しており、さらに側壁の袖石相当部分もほぼ同位置であるところから、ほぼ同様の石室企画に従って造られた可能性が強い。

石室の最下段に据えられた石材は、比較的形状や大きさの整ったものを用いている。第28図はこれらの石材を古墳ごとに棒グラフにして表わしたもので、これによって最下段石の大きさやその傾向を知ることができる。石材の大きさは古墳ごとに多少のばらつきがみられるものの、全体としては長さ20~40cm程のものがよく用いられており、石材の大きさからいえば4号墳のものが全体として大きな石材を用いている。また、3号墳の石材は大きさがよく揃っており、この傾向は特に東壁の方が顕著であった。

調査した4基5面の石室床面はすべて敷石面をもっていた。しかし、敷石の状態は一様ではなく、1号墳の上・下部床面や3号墳の床面では拳大の角礫を敷きつめていたのに対して、4号墳・5号墳では奥壁付近に小礫・角礫を、これより開口部にかけては板石を一面に敷きつめるという差異がみられた。敷石面の範囲は、1号墳が奥壁より約5mまで、3号墳が約3.2mまで、4号墳が約4mまでみられたが、5号墳のみは石室床面の全域に及んでいた。この他に、5号墳の床面敷石には段が設けられていたが、この位置は3号墳の敷石面

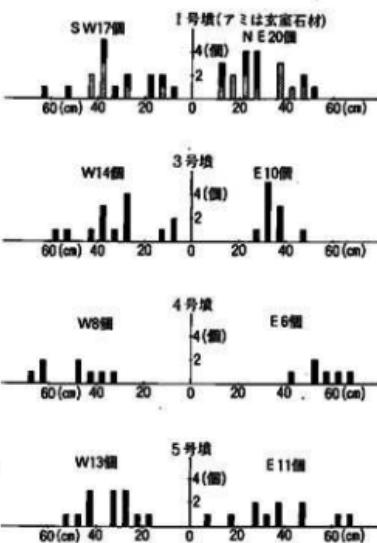


図28 最下段石材の寸法比較図

の範囲とほぼ一致しており、この区画が玄室部分を意識したものとみることができる。

なお、1号墳では、本来の床面を埋めて新たな床面が造り出されていたが、こうした二重の床面をもつ石室は類例が乏しいだけに、貴重な資料といえよう。

石室の使用形態 調査した4基の古墳床面から遺物出土状態を総合すると、玄室中央部では遺物の出土が少なく、特に土器類等に関していえば、奥壁付近の両隅や袖石の付近あるいは後部等で集中して出土した点をあげることができる。一方、この玄室中央部については1号墳の上部床面や5号墳床面では鉄釘多數が、また3号墳床面では金環が1個出土しているので、この部分が本来は棺が安置された場所であったとみることができよう。この場合、石室幅の狭い3号墳等については、単次葬と考えるのが妥当であろう。

出土土器の年代 出土した須恵器をみると、3・4号墳では杯の受部たちあがりが非常に短かく、底部も回転ヘラ切りのまま未調整であるものがみられ、7世紀前葉の年代が考えられる。また上・下の床面をもつ1号墳では、上部床面に3・4号墳と同型式のものが含まれており、下部床面では杯・蓋合わせて3個体出土したのみであるが、これらにはすべてヘラケズリがみられ、杯の受部たちあがりも他のものに比べ高く、口径も若干大きいことなどからその製作年代は6世紀末葉と考えられる。

石棺について 5号墳から出土した組合式家形石棺の破片は、二上山産の凝灰岩によって造られており、従来から当地域で発見されてきた石棺石材(竜山石)と異なる点を明らかにした最初の例として貴重である。また、嵯峨野地域の石棺出土古墳(大覚寺1・2・3号墳、広沢1号墳、双ヶ岡1号墳、御堂ヶ池1号墳)はそのいずれもが比較的大型の横穴式石室をもつ点を特色とするが、今回の出土例は小型の無袖式石室で年代的にも7世紀前葉に下るものと思われる点で異なっている。

支群の動向 出土した須恵器の年代観を参考に、これら4基の築造年代と支群全体の動向をみると、まず6世紀末葉に1号墳が築造され、さらに7世紀前葉には3・4・5号墳が築造されたものと考えられる。なおこの3・4・5号墳の築造とほぼ同じ墳1号墳においては新たな床面を構築して追葬を行っている。また、今回未調査の6~8号墳についてもその墳丘の形状からこの時期に築造された可能性が強く、本支群における最盛期がこの墳にあったと考えて大過なかろう。

第IV章 資料紹介

右京区鳴滝音戸山町出土の平安時代土器

ここに掲載する資料は、昭和34年当時付近一帯の造成工事によって出土した遺物で、地元の橋本城二氏が採集され長らく保管されたものを、今回の古墳調査を契機に提供していただいたものである。採集地は右京区鳴滝音戸山町の本古墳群が立地する所の東側一帯で、現在は民家が建ち並ぶ地点である。

提供していただいた遺物の内訳は、土師器皿2点、壺1点と無釉陶器の平底壺1点及び炭少量であり、昭和34年3月20日付の新聞紙に包装されていた。

土師器皿は2点ある。(1)・(2)はともに同法量で、口径16.5cm、深さ2.5cmを測る。(1)・(2)は口縁部をヨコナデし、(2)のみは体部下半をヘラケズリしている。壺(3)は口径16.0cm、深さ17.0cmを測り、体部外面は粗いハケを施した上にヨコ方向のタタキメをもつ。外面はヨコハケを施すが、タタキの際のあて具で下半が消えている。無釉陶器は破片のため図示できなかったが、推定口径9cm、底部径10cmの平底を有する壺である。

以上の土器はその形態や手法の特徴から平安時代前期(9世紀中頃)に製作されたものと思われるが、これらと同時期の遺物は1・3・5号墳の調査でも出土しており、両者の関連性が注目される。特に5号墳では平安時代前期に属する灰釉薬壺が中に骨片を含んだ状態で石室内から出土しており、当時開口状態であった石室が藏骨器の安置場所として利用されたことを明らかにしたが、これらの資料も同様に埋葬時に用いられた可能性があり、そうであれば付近一帯が平安時代には墓地として広範に利用されていたことを示す資料として興味深い。

なお、これらの資料は御本人の希望で京都市へ寄託され、現在は財團法人京都市埋蔵文化財研究所がこれを保管している。

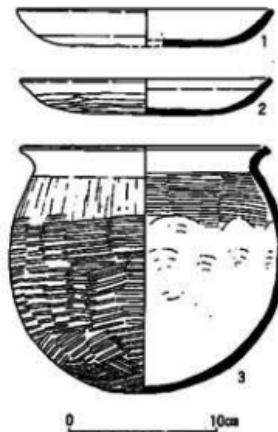


図29 採集土器実測図

図 版



1 1号墳全景（上面、東から）



2 石室全景（上面、東から）



3 遺物出土状態（上面、北東から）



1 航空写真（丸印が調査地）



2 航空写真（丸印が調査地）



1 1号墳全景（下面、東から）



2 石室奥壁（下面、東から）



1 3号墳調査前全景（北から）



2 3号墳全景（北から）



1 3号墳奥壁と遺物出土状態（南から）



2 石室全景（南から）



3 閉塞の状態（西南から）



1 4号墳全景（南から）



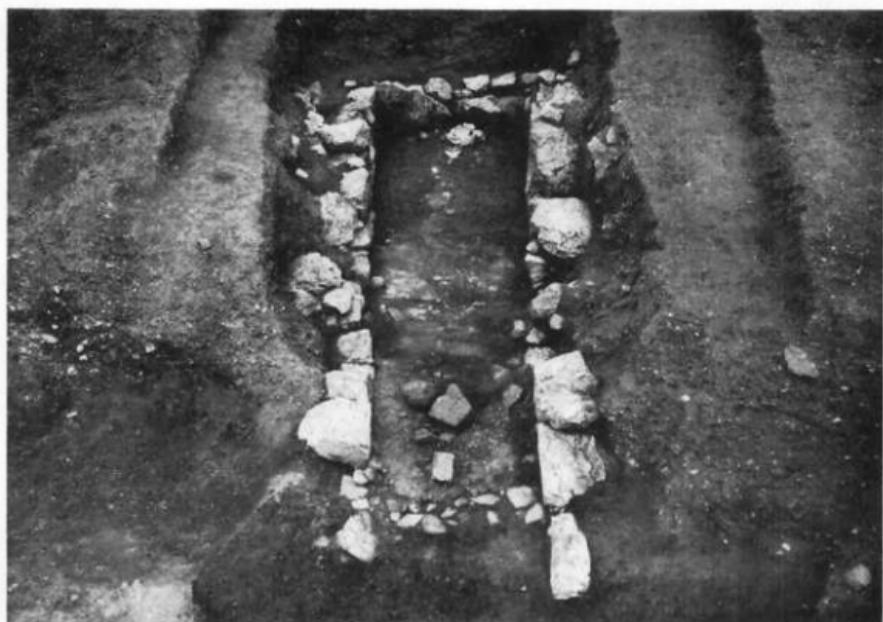
2 奥櫻と遺物出土状態（南から）



1 4号墳(右)と5号墳(左)調査前全景(南西から)



2 5号墳調査前全景(南東から)



1 5分墳石室全貌 (南から)



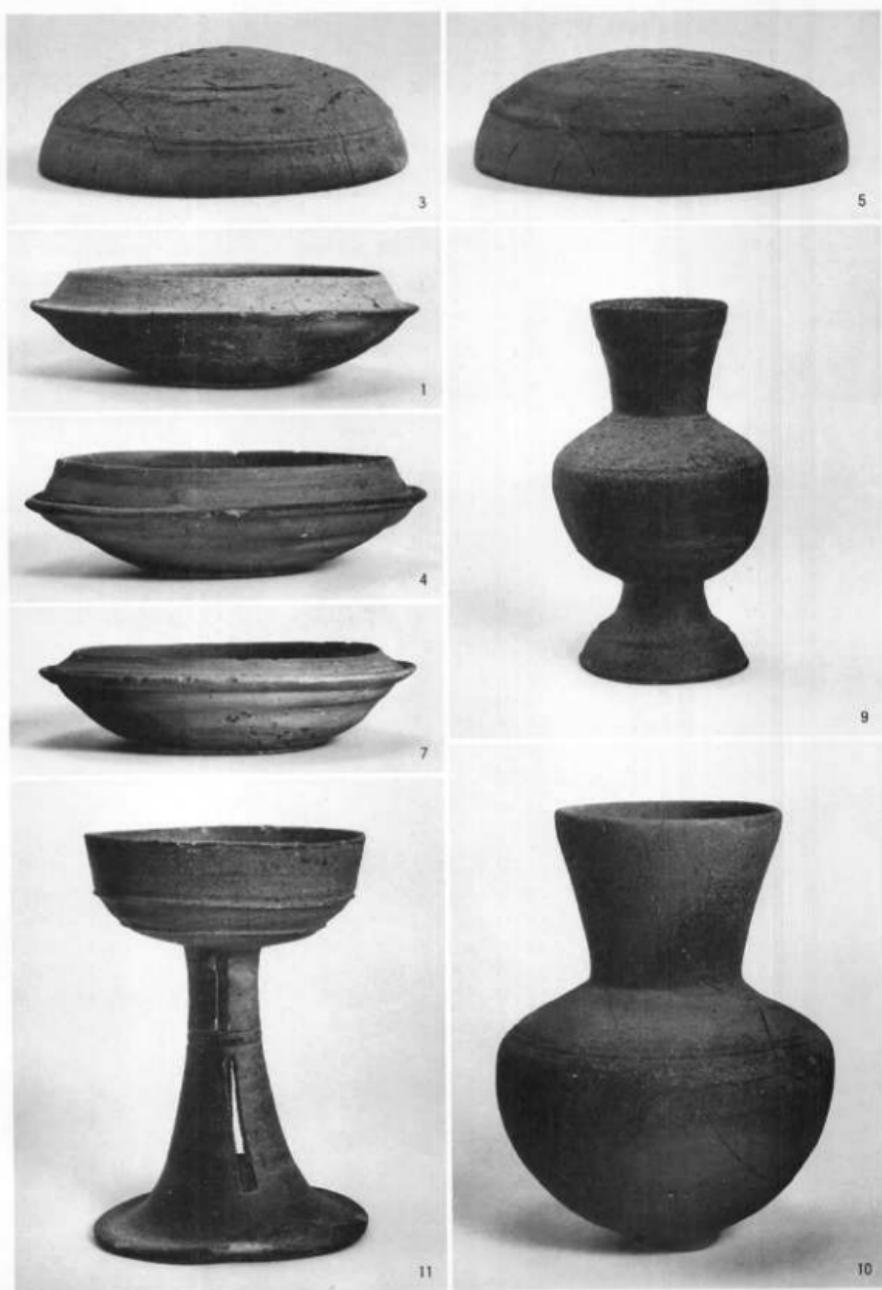
2 石棺破片出土状態 (北面から)



3 灰釉茶壺出土状態 (南西から)



5号墳石室全景2（南から）



1号墳出土土器



1



3



2



4



7



5



6



8



9

3号墳出土土器



1



2



3



4



2

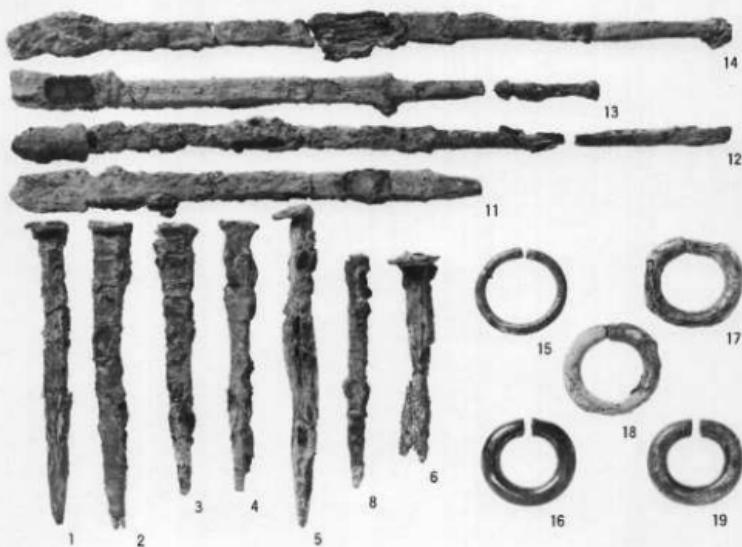


1

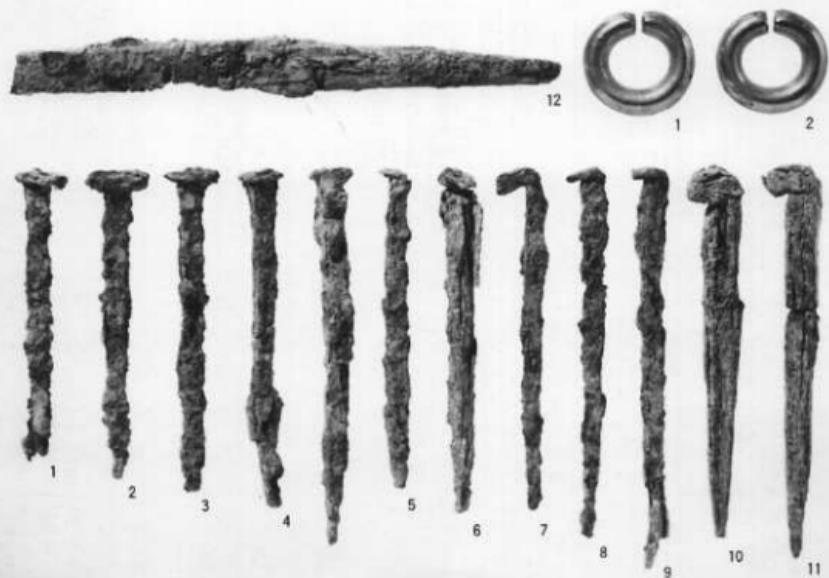


2

4號墳(1~4)、5號墳(1.2)出土土器
5號墳出土石棺(最下段1.2)



1 1号墳出土鐵器、銀環



2 5号墳出土鐵器、4号墳出土金環（右上）

音戸山古墳群発掘調査概報

昭和 58 年度

発行日 昭和 59 年 3 月 31 日

発 行 京都市文化観光局

住 所 京都市左京区岡崎最勝寺町 13 京都会館内

編 集 財團法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印 刷 真 陽 社